

# 京都橘大学 文化財調査報告 2008

牧野車塚古墳・禁野車塚古墳・宮道古墳・大宅廃寺瓦窯跡

2009年3月  
京都橘大学 文学部



## はじめに

本学の文化財学科は、1996（平成8）年に設置申請し、同年12年に認可され、1997（平成9）年4月より開設された。その設置理由を当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける一環として、本学では2000（平成12）年3月から京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、発掘や測量調査を継続し、多くの学生が参加し、調査の方法を学んできた。

昨年度は大阪府枚方市の牧野車塚古墳測量調査、滋賀県大津市熊ヶ谷3・4号墳の発掘調査を実施した。そして、昨年度から年ごとに文化財の調査、研究成果をまとめて報告することにした。そうすることで、各回生に調査から報告書作成までの一貫した流れを体感できるようになるからである。

そこで行った現地の調査と本書を作成するにあたっては、多くの方々にお世話になった。今後とも文化財調査についてのご理解、ご協力、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げる次第である。

平成21年3月31日

京都橘大学文学部

## 例　　言

1. 本書は、京都橘大学が2008年度に実施した大阪府枚方市牧野車塚古墳・禁野車塚古墳、京都市山科区宮道古墳・大宅廃寺瓦窯跡の測量調査の報告と、その調査に関連した「前方後円墳周濠の渡土堤について」と題する研究論文を掲載したものである。
2. 遺跡と遺構は国土座標世界測地系によってその位置を示した。
3. 本文の執筆は、はじめにと第1章を一瀬和夫・堂ノ本智子、第2・6章を高橋裕子、第3章を一瀬、第4章を堂ノ本、第5章を松浦未春があたった。
4. 本書の編集は、一瀬が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
5. 調査にあたっては、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、関西大学考古学研究室、京都府立大学考古学研究室、京都市教育委員会、勧修寺、洛東自動車教習所、小川裕見子、大竹弘之、西田敏秀、米田文孝、菱田哲郎、堀大輔、宇野隆志、筑波常遍、森田雅彦、森田清、山手重信、辻修、奥村弥恵をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝の意を表したい。

## 目　　次

### はじめに・例言

第1章	2008年度の調査経過	1
第2章	牧野車塚古墳墳丘補足測量調査	3
第3章	禁野車塚古墳墳丘測量調査	9
第4章	中臣十三塚・宮道古墳墳丘測量調査	14
第5章	大宅廃寺瓦窯跡地形測量調査及び窯体実測	19
第6章	前方後円墳周濠の渡土堤について	23
報告書抄録		



# 第1章

## 2008年度の調査経過

### 1. 2008年度の調査状況

今年度からは本学の夏期調査の中に、6日間以上とそれに伴う平板測量の予備実習に参加することで、「文化財調査実習Ⅰ」という授業を組み込むことになった。そして、かつて1976年から1985年を中心に活動していた橋女子大学考古学研究会が本学にはあったが、それを引き継いだかたちで京都橋大学考古学研究同好会が本年度から立ち上がった(1)。こうしたメンバーの調査参加もあった。そのため、今年度の参加者は多くなった。その状況は下記に記すとおりである。

さて、今年度の現場作業は、まず7月より牧野車塚古墳の墳丘の補足測量に入った。8月前半は牧野車塚古墳の調査と併行して、禁野車塚古墳の墳丘調査。8月後半は本学が所在する京都市山科区において、宮道古墳墳丘測量調査と大宅廢寺瓦窯跡地形測量調査を実施した。

その後の整理作業にあたっては、考古学実習の授業を中心に、堂ノ本智子、高橋裕子、青木誓二、小室直人、紺野辰一、坂本聰美、西山祐矢、日置舞子、藤本義裕、松井綾子、松浦未春、松場絢子、三井彩、村井智子、山崎宙、山岸訓明が行った。

### 2. 牧野車塚古墳墳丘補足測量調査

牧野車塚古墳は、大阪府枚方市車塚1丁目に所在する。周囲に周濠・外堤を備えた淀川左岸でも屈指の規模を誇る前方後円墳である。2007年の調査で全体の測量図が完成し、今年度はその補足調査と、その測量図から渡土堤



写真1 牧野車塚古墳 地中電磁誘導探査風景

と思われるものが存在する可能性が高くなり、その部分の調査を10cmコンタ、縮尺1/50で行った。

調査は関西大学・京都橋大学・京都府立大学・財団法人枚方市文化財研究調査会の4者を中心に行なった。本学は、調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2008年7月4日から7日と、8月4日から8月10日の2回に分けて、現地にて調査を行なった。なお、併行して地中探査を東京工業大学が行っている。

本学の現場参加者は、堂ノ本智子、牧田梨津子、高橋裕子、森真奈美、山内沙織、山口巧、坂本聰美、松井綾子、松浦未春、松場絢子、三井彩、今崎健太、久喜政美、塩見良平、田口五基、竹村亮仁、中山尚恵、山崎美輪、宇野まなみ、民辻夕希子、増岡彩乃、松村真である。

### 3. 禁野車塚古墳墳丘測量調査

禁野車塚古墳は大阪府枚方市宮之阪5丁目に所在する牧野車塚とならぶ規模をもつ前方後円墳である。1972年に国史跡指定を受けている。2006年の範囲確認調査でこれまで考えられてきた古墳築造時期よりさかのぼる可能性が出てきたので、牧野車塚古墳に続けて、関西大学・京都橋大学・京都府立大学・財団法人枚方市文化財研究調査会の4者を中心に行なった。

本学の調査は、調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2008年8月4日から8月11日、9月8日、10月17日に現地にて調査を行なった。こちらの方も、併行して地中探査を東京工業大学が行っている。

本学の現場参加者は堂ノ本智子、高橋裕子、森真奈美、山口巧、坂本聰美、日置舞子、松井綾子、松浦未春、村井智子、山崎宙、秋山詩保子、木曾和沙、久喜政美、酒井裕加、清水真人、鈴木小麦、瀬戸新太郎、藤堂雅則、藤居良平、三木章弘、森勇人、山里紋可、山瀬尋彌、天



写真2 牧野車塚古墳 地中レーダー探査風景

野充子、柿添康平、川端優太、鳥越祐江、吉岡彩、山本千尋である。

### 3. 宮道古墳墳丘測量調査

さて、近年の山科区の開発は多く、かつての山林は多く失われている。現在残る遺跡についての現状を記録におさめるために、8月後半はそうしたものを中心に調査を実施した。

宮道古墳は本学に近い西方、京都市山科区勧修寺西栗栖野町に所在する。

中臣十三塚古墳群の一つと目される古墳であり、現在でも墳丘が良好に残る古墳である。その現状について、詳細な墳丘測量図がなかったために実施した。

調査は調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2008年8月18日から8月23日に現地にて調査を行った。

現場参加者は堂ノ本智子、高橋裕子、坂本聰美、松浦未春、松井綾子、三井彩、村井智子、今崎健太、塙見良平、鈴木小麦、竹村亮仁、藤堂雅則、中山尚恵、福井香菜、藤居良平、森勇人、山里紋可である。



写真3 禁野車塚古墳 墳丘測量調査風景



写真5 宮道古墳 墳丘測量調査風景

### 4. 大宅廃寺瓦窯跡地形測量調査

大宅瓦窯は京都市山科区大宅向山に所在し、本学とは至近距離にある。

現在は竹藪の中、1基の窯の焼成部後部が観察できるものである。この窯の現状と、この他に近接して窯が存在するか否かを検討するために地形測量を行った。

調査は調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2008年8月25日から8月30日に現地にて調査を行った。

現場参加者は堂ノ本智子、高橋裕子、小野昌子、福田沙織、坂本聰美、日置舞子、松井綾子、松浦未春、三井彩、村井智子、今崎健太、川田桐子、木曾和沙、酒井裕加、塙見良平、清水真人、田口五基、竹村亮仁、藤堂雅則、中山尚恵、藤居良平、三木章弘である。

#### 注

- (1) 京都橘大学考古学研究同好会『山科分布調査概報復刻版』2008年



写真4 宮道古墳 遠景



写真6 大宅廃寺瓦窯跡 遠景

## 第2章

# 牧野車塚古墳 墳丘補足測量調査

### 1. はじめに

牧野車塚古墳は大阪府枚方市に存在する。周囲3方を穂谷川・淀川・天野川に囲まれており、標高22m余りの交野台地の北西部に営まれた前方後円墳である。外堤を含めた規模は北河内地域最大で、その原型は十分に保たれている。そのため、1922年に国史跡として指定されており、周囲を公園として整備している。

### 2. 既往の調査

牧野車塚古墳の調査はこれまで、1978年に後円部西側外堤隣接地で実施された第1次調査と、2004年に前方部墳丘と周溝で実施された第2次調査のみであった。

第1次調査では外堤に沿う形で溝状遺構が検出され、その溝の中から2個体分の円筒埴輪列が約10cm間隔で検出されたが、詳細は不明である（1）。

第2次調査では墳丘部より板石が小口積みにされるという特異な葺石が検出された。また、それまで5世紀前半と考えられてきた築造時期が出土埴輪（鰐付円筒埴輪）などから見て、前期にさかのぼると考えられた（1）。

一方、牧野車塚古墳北側に隣接している小倉東遺跡の調査でも、後円部北側で外堤外側と目される浅い溝状の遺構と、周溝北東部隅外側より、周溝と考えられる遺構の一部が検出された（2）。

これまで牧野車塚古墳の測量図は、1966年に枚方市史編纂事業として行われたものと、それに先行して大阪府教育委員会事業として奈良国立文化財研究所（現、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）が実施したものがあった。しかし、いずれも1mコンターラインで作成しており、現在行うような細かい測量図はなかった（3）。

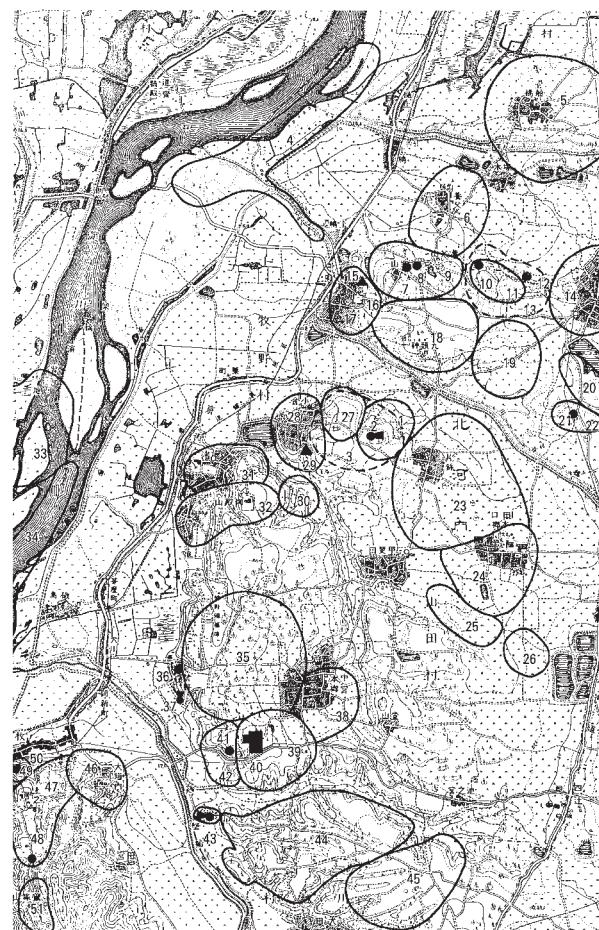
そこで、昨年本学と関西大学、京都府立大学は大阪府枚方市にある牧野車塚古墳で100分の1、20cmコンターラインによる平板測量と、トータルステーションによる測量調査を行なった（4）。

その結果、後円部北側と前方部で幅の狭いテラスが確認できた。このことから、後円部南側を除いて二段築成であった可能性が高いこと。また、従来外堤とされてい

た部分にあたる後円部南東に方形状の、前方部南東に円形状の小規模な墳丘状隆起が存在することがわかった。さらに、くびれ部両側、後円部北西に渡土堤と思われる高まりも現状確認することができた。

しかし、一部分で測量図が不完全な部分があったため、今年度の7月4日～7日までの4日間、補足調査を行った。それに伴い、後円部と後円部南側にある円墳と思われる高まりで東京工業大学によるレーダー等の地中探査を行なった（5）。

そうした古墳状隆起の可能性の確認とともに、昨年度の調査において古墳の北側に4箇所で渡土堤らしき高まりの可能性も確認していた。補足調査の際にその1箇所



- 1 小倉東遺跡
- 2 牧野車塚古墳
- 3 牧野平塚古墳群
- 4 淀川河床遺跡
- 5 船橋遺跡
- 6 養父遺跡
- 7 宇山1号墳
- 8 宇山2号墳
- 9 宇山遺跡
- 10 養父古墳
- 11 養父丘遺跡
- 12 比丘尼塚古墳
- 13 養父古墳群
- 14 招提寺内村遺跡
- 15 牧野阪瓦窯跡
- 16 牧野阪古墳
- 17 牧野阪遺跡
- 18 九頭神遺跡
- 19 招提中町遺跡
- 20 招提今池遺跡
- 21 日置山古墳
- 22 日置山遺跡
- 23 交北城の山遺跡
- 24 田口中島遺跡
- 25 甲斐田新町遺跡
- 26 出屋敷西遺跡
- 27 小倉遺跡
- 28 アゼクラ遺跡
- 29 栗倉瓦窯跡
- 30 祇東遺跡
- 31 祇遺跡
- 32 御殿山遺跡
- 33 前島遺跡
- 34 淀川河床遺跡（その2）
- 35 禁野本町遺跡
- 36 白雉塚古墳
- 37 禁野上野古墳
- 38 中宮尼寺田遺跡
- 39 百済寺遺跡
- 40 百済寺跡
- 41 注具ドンバ墳丘墓
- 42 中宮ドンバ遺跡
- 43 禁野車塚古墳
- 44 星丘西遺跡
- 45 星丘遺跡
- 46 岡東遺跡
- 47 枚方上之町遺跡
- 48 枚方小学校南方古墳
- 49 万年寺山古墳
- 50 万年寺山遺跡
- 51 鷹塚山遺跡

図1 牧野車塚古墳の周辺遺跡分布（小倉東遺跡IIより）

でレーダー探査を行なった結果、渡土堤の高まりと考える周辺に堆積層があまりないことがわかった。このことは現状地形を測量することによって、発掘調査で旧表面を図化することに近い成果を得ることが想定できた。

そこでさらに8月4日～10日までの7日間、渡土堤の詳細測量図をとるための補足調査を行った。50分の1、10cmコンターラインで渡土堤の測量精度とした。渡土堤は後円部側の西から東に向かって、それぞれ順に渡土堤A、渡土堤B、渡土堤C、渡土堤Dとした(図2)。

### 3. 渡土堤詳細測量の所見

渡土堤A(図3)は東西20m、南北12m、渡土堤B(図4)は東西21m、南北8m、渡土堤C(図5)は東西21m、南北9m、渡土堤D(図6)は東西22m、南北15mの範囲を測量した。

調査の結果、渡土堤Aの西側周溝底T.P.21.860m、東側周溝底T.P.21.800m、比高差0.060m、渡土堤中央の高さT.P.22.249m。渡土堤Bの西側周溝底T.P.21.916m、東側周溝底T.P.21.938m、比高差0.022m、渡土堤中央の高さT.P.22.139m。渡土堤Cの西側周溝底T.P.21.969m、渡土堤中央の高さT.P.22.185m。渡土堤Dの西側周溝底T.P.21.361m、東側周溝底T.P.21.278m、比高差0.083m。渡土堤の比高差はA-B間では0.11m、B-C間では-0.046mとなった。またDの東側は2004年の調査での検出高はT.P.22.400m、周溝の下端は

T.P. 20.600mである(1)。

一方、等高線からの所見は以下の通りである。

- ・渡土堤状のものを経由して後円部側と前方部側で高低差を持つこと。
- ・渡土堤の中心と周溝底では相互の地形に違いが出ること。
- ・渡土堤が墳丘からゆるやかに下ったのち、外堤側に再度登っていくこと。
- ・渡土堤がある位置は外堤側からも墳丘へと伸びるような突出した地形になっていること。

少なくとも以上の点が観察できた。

4つの高まりのうち、特に渡土堤Aの輪郭が明瞭に出てきた。

墳丘側から外堤へと伸びる道が昨年の調査の測量図でも見られるが、さらにその範囲と周溝底の高低差があることが確実視できるようになった。また、渡土堤の平坦面の範囲を正確に知る事ができた。上端幅約1m、長さ約3.5mである。

また1/100スケールの測量図では読み取ることが難しかった渡土堤Bも、他3本にくらべ顕著ではないが、渡土堤がある位置は外堤側からも墳丘へと伸びるような地形になっていることが見て取れた。しかし、渡土堤Cとの比高差を見るとあまり高まりがないこともわかった。

渡土堤Aの図面を図6のようにa-a'間とb-b'間、そしてc-c'間の3ヶ所で断面図を作成した(図7)。

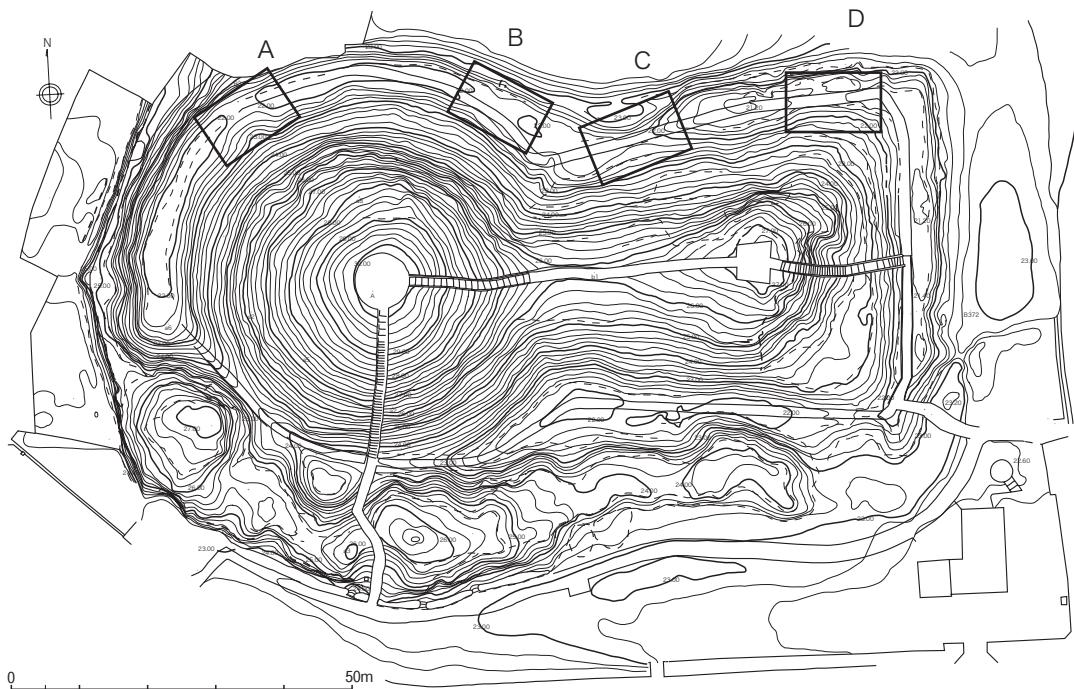


図2 牧野車塚古墳 墳丘測量図と渡土堤詳細測量設定区

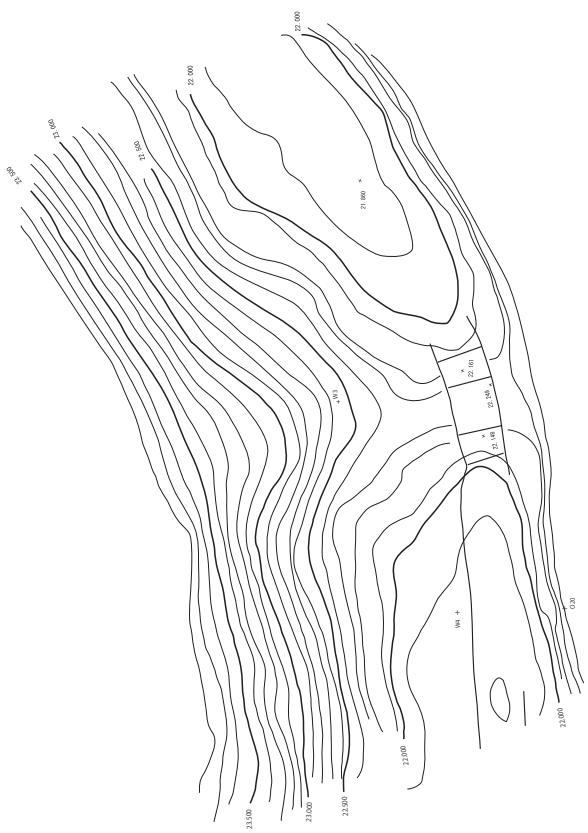


図3 牧野車塚古墳 渡土堤A

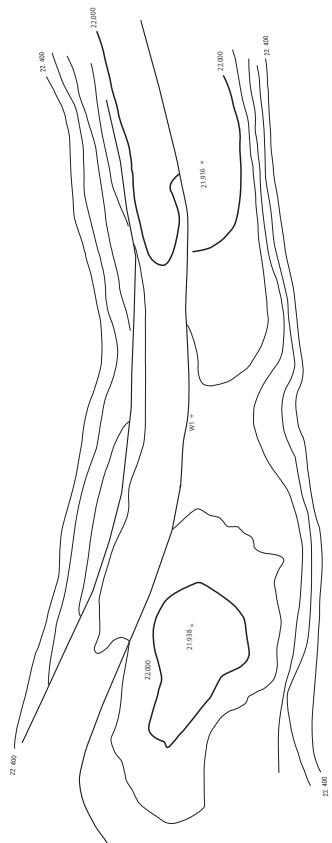


図4 牧野車塚古墳 渡土堤B

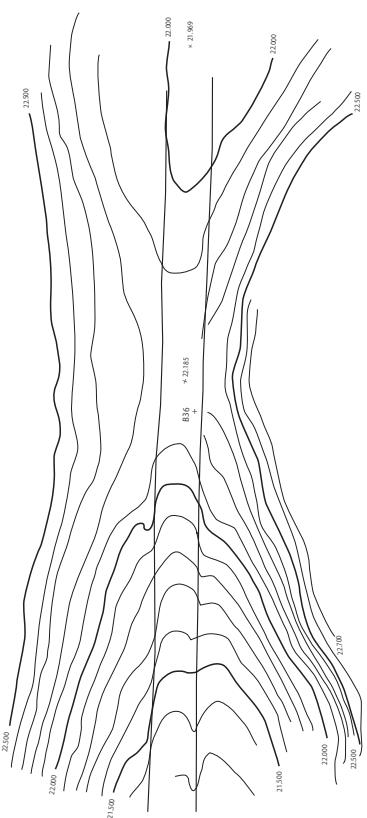


図5 牧野車塚古墳 渡土堤C

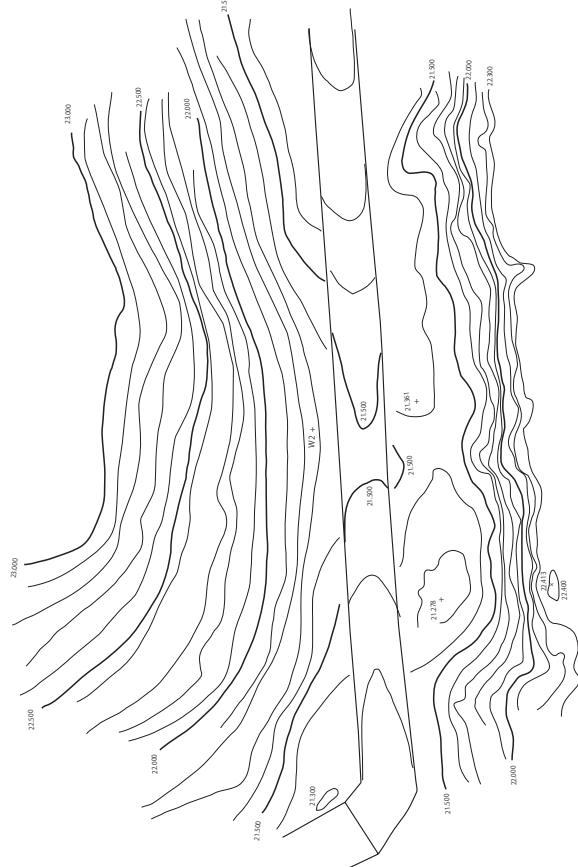


図6 牧野車塚古墳 渡土堤D

S = 1 / 200

これを見ると a - a' 間と b - b' 間で最高で0.5mも差が出ている箇所もある。b - b' 間と b - b' 間の斜面が急激で墳丘裾が見られるのに対し、a - a' 間では緩やかに下っており、墳丘裾は読み取れない。

これにより、渡土堤がある箇所とそうでない地点での墳丘から周溝、そして外堤への地形に違いがあり、渡土堤がある箇所では墳丘部分でもかなり違いが出ることがわかった。

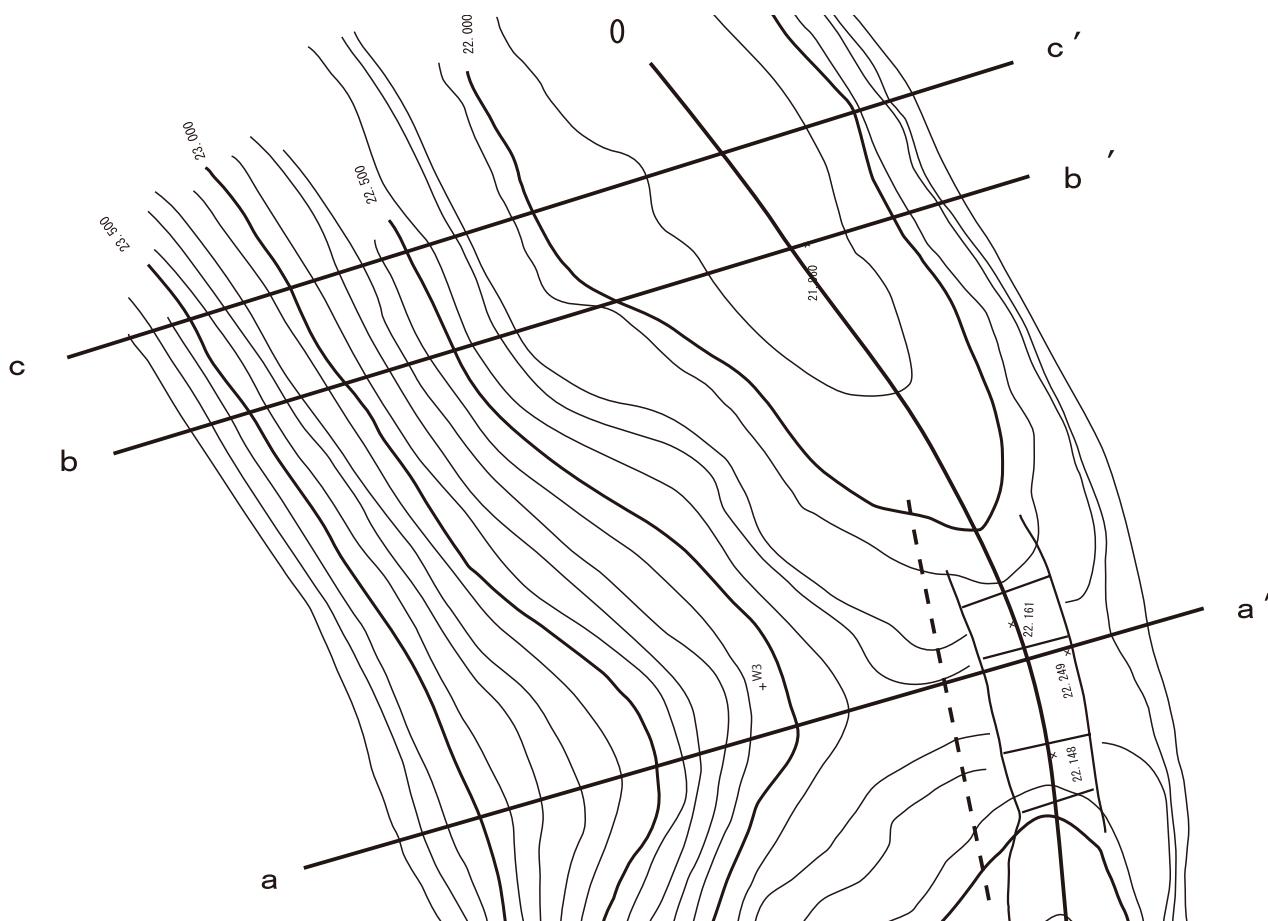


図7 牧野車塚古墳 渡土堤A 断面切断位置図

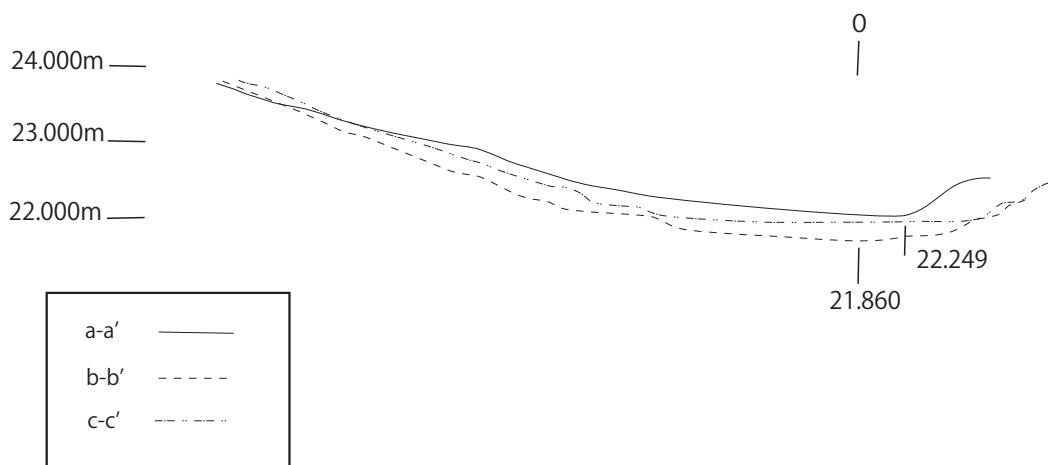


図8 牧野車塚古墳 渡土堤A 断面図

## 4. おわりに

これまで渡土堤の本格的な測量はされていなかった。そのため、今回の調査では詳細な測量図が作成できたことにより、古墳の周溝底における全体的な様相に関して新たな資料を提示できたと言えよう。

これをもとにし、さらにこの渡土堤にめぐるさまざまな問題を6章で検討しているので、そこで詳しく述べることにする。

### 注

- (1) 枚方市文化財研究調査会『史跡 牧野車塚古墳第2次調査』2005年
- (2) 枚方市文化財研究調査会『小倉東遺跡』Ⅱ 2006年
- (3) 枚方市史編纂委員会『枚方市史』第1巻 1967年
- (4) 京都橘大学「牧野車塚古墳測量調査」『京都橘大学 文化財調査報告2007』2008年
- (5) 地中探査は電磁誘導とレーダーを墳丘各部で適宜行った。また、この調査成果については別途、全体報告書に組み込むことを予定している。



写真7 牧野車塚古墳 渡土堤A  
(東より)



写真8 牧野車塚古墳 渡土堤A  
(西より)



写真9 牧野車塚古墳 渡土堤B  
(東より)



写真10 牧野車塚古墳 渡土堤C  
(西より)



写真11 牧野車塚古墳 渡土堤D  
(東より)

# 第3章 禁野車塚古墳墳丘測量調査

## 1. はじめに

禁野車塚古墳は大阪府枚方市宮之阪5丁目に所在する。北西方の淀川に流れ込む天野川に面した低位段丘上にあり、天野川に向かって西方にはりだす舌状微高地の先端部に立地する。西に面した前方部をもつ墳丘長約120mを測る前方後円墳である。この墳丘は北河内では屈指の規模を誇り、1972年に国史跡指定を受ける。

築造時期について古くは奈良県桜井市箸墓古墳に墳丘が類似するとも評価されたが、その後、低地にあることから5世紀代におかれていた。現在では出土埴輪により、4世紀代という評価が多数を占める。しかし、その築造

年代は確定的と言えるものではなかった。

そのため昨年度の枚方市牧野車塚古墳の墳丘測量につづき、関西大学（代表 米田文孝）・京都橘大学（代表 一瀬和夫）・京都府立大学（代表 菊田哲郎）・財団法人枚方市文化財研究調査会の4者を中心に、より広域的な研究をめざし、新たに淀川流域前期古墳研究調査団を結成し、淀川水系沿いの古墳の実態を再検討できる資料を整えることにした。

これまで既存の墳丘測量図としては、1966年に市史編纂事業に伴ったものがある。これは墳丘長約110mを測る二段築成の前方後円墳として『枚方市史』に所収されている（1）。しかしながら、その測量図は1mセンターのものであったため、今回の墳丘測量調査では、牧野車塚古墳と同じく20cmセンターによる平板測量図及びトータルステーションを用いたデジタル測量図の2種類の作成から、墳丘比較を行えるようにした。

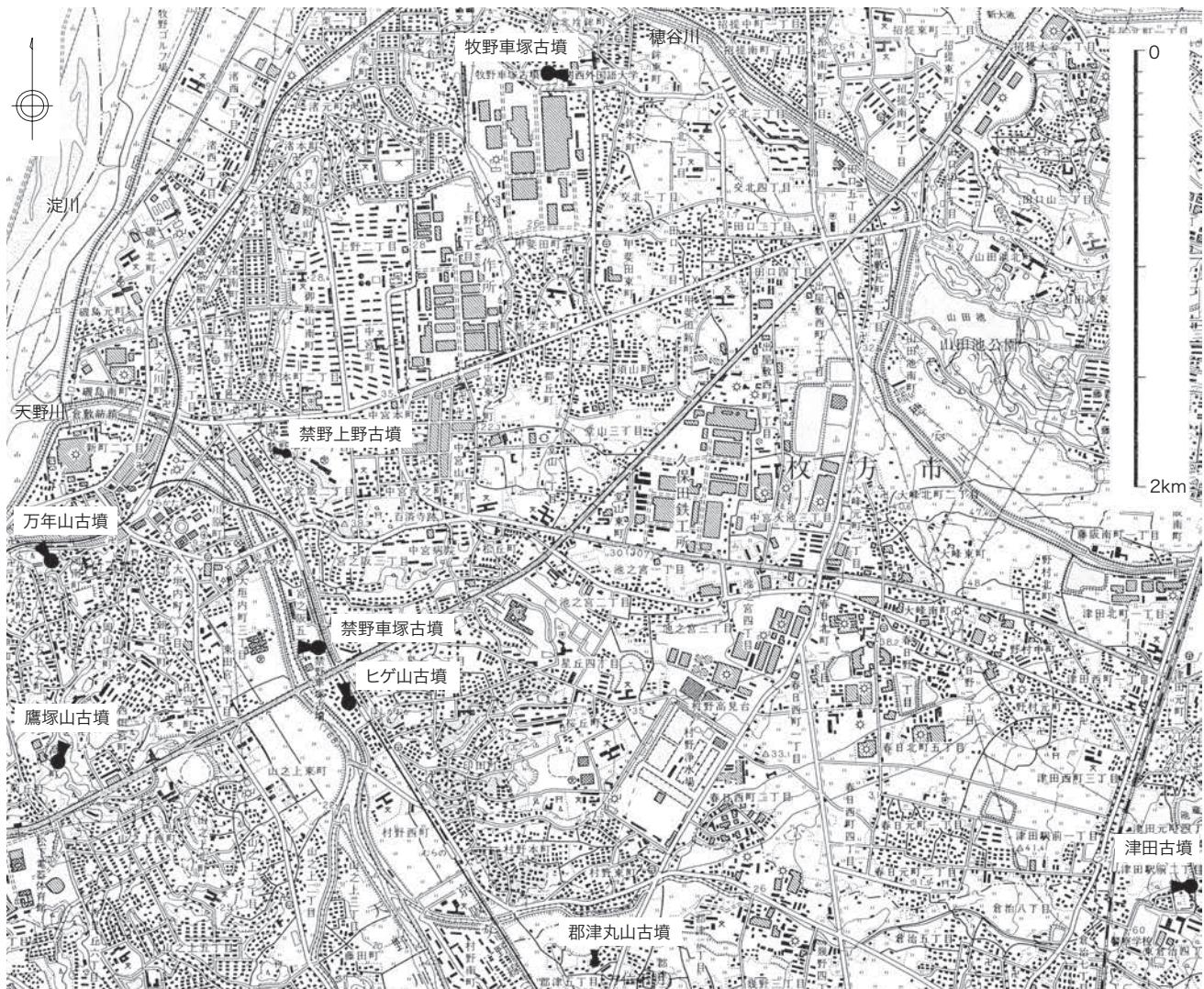


図9 穂谷川、天野川下流の前方後円墳の分布

## 2. 既往の調査

禁野車塚古墳は、1734年に『日本輿地通知誌畿内部』巻第37河内國之11、『河内名所図絵』などに記載される。

1966年枚方市史編纂事業では、その踏査で安山岩板石と埴輪が採取されている。墳丘周りの埴輪の方は後円部裾の断面に包含されていたものがある。葺石は径10cm大の砂岩質の川原石が後円部南側の下段に多く露出していたことがわかっている。一方、後円部頂の盜掘坑周囲から板石・丸石や埴輪片が確認され、安山岩質の板石の存在から堅穴式石室が想定された。埴輪は、円筒埴輪の他、平行する沈線と0.8cmの薄手のものがあるとされる。

1970年に宅地造成に伴って2m以上の厚さの盛土が墳丘周囲に迫ることになった。そのため、1971年に史跡指定範囲の確認調査が行われた（2）。その際の調査では周溝等を持たないと判断されている。

2006年の後円部南東隣接地での範囲確認調査では、2mの厚さのコンクリート混じりの堆積層とその下のT.P.12.4~12.5mの面から円弧を描く墳丘基底部が確認されている（3）。その結果、後円部径が60m前後に復元された。他には、転落した葺石使用石材には天野川及び地山層で採取できる花崗岩・チャート・輝緑岩が検出された。また、墳丘際で検出された新しい土坑埋土中には橄欖石安山岩の板石が他の石とともに高率で含まれていた。出土遺物には埴輪の他、弥生土器、土師器、須恵器があった。さらに、墳丘の下には弥生時代中期前半の土坑SK01が検出され、その上にある墳丘は盛土によって形づくられていることが分かった。

## 3. 測量調査の所見

さて今回の調査では、世界測地系に基づく基準杭（鉛）をもとに東西125m、南北76m、9,500m<sup>2</sup>の範囲を測量した。平板測量とともに行ったトータルステーションは測点の座標値からセンターを派生させる方法を用いたが、昨年の牧野車塚古墳における1mピッチの測点では墳丘段築テラスなどの微妙なものが拾いきれなかったことから、今回は0.5mの細かい精度に変えることになった。その結果、両者の方法に大きな差がなくなった。

成果の詳細は後日の全体報告にゆずるが、2006年の調査などもふまえて墳丘各部の復元数値をここにかかげておく。

墳丘長約120（110）m、後円部径63（57）m、同高9（9.9）m、前方部幅55（40）m、同高3.4（4）mとな

る（括弧内は既存データ）。さらに、墳頂平坦面は径22m、くびれ部は幅25m、同高さ3mとなる。ただし、戦後すぐの航空写真からすれば、全体の地形がさがる北側の墳丘裾はこれより大きくなる可能性が多いにある。

次に、今回の測量で得られた墳丘の特徴を以下に示すこととする。

墳丘は天野川につきだす微高地状の平地形に立地する。

後円部南東側裾に露出する崩面観察ではブロック土を多く含んだ土層が一様に認められる。このことから墳丘の上半分は盛土でつくられていることが分かる。

墳丘頂は南北方向の橈円形を呈し、その範囲の下に主体部の存在が考えられる。

後円部は西側前方部の方向にとがる卵形を呈する。

後円部からくびれ部にかけて明瞭なスロープがある。

後円部裾はくびれ部付近で正円形の軌道から外側にはずれ、明瞭に屈曲せずに前方部へゆるやかに続していく。

前方部の幅がくびれ部で最も狭くならずに、その部分はくびれ部より前方部前面側によっている。

前方部側辺の輪郭は内側にゆるく弧状を呈し、総じて細長い撥形の前方部となる。

## 4. 墳丘形態と時期

こうした墳丘の各部数値と墳丘の諸特徴はことごとく兵庫県姫路市の丁瓢塚古墳と一致する（4）。

この古墳は奈良県桜井市箸墓古墳の平面プランを縮小した相似墳と認められるものである。このことから、禁野車塚古墳の墳丘もまた箸墓類型として捉えることができ、河内の中では数がきわめて限られる、最も早くに築造されたもののひとつとして位置づけることができる。

さらに現状の墳丘表面ではT.P.16m台付近でテラスが観察できることから、二段築成の墳丘が考えられる。ただし、2006年に検出された墳丘裾の位置状況を考えると、その下に2.4mの高さの段がさらに備わることが十分に推測できる。丁瓢塚古墳の報告においてもこうした下の段の存在は同様に予測されるものである。

この墳丘形態とともに、2006年調査の出土埴輪もケズリ技法などから古く位置づけることができるものと思われる。その築造時期は4世紀初頭、もしくは3世紀代におさまる可能性が高いことになる。

そこであらためて注目したいのは『枚方市史』第1巻の第4章の北野耕平氏の文章である。いわば車塚の立地は天野川が形づくった低湿な氾濫原に直角に突出し、250m南方のヒゲ山古墳も同様であるとする。そして、

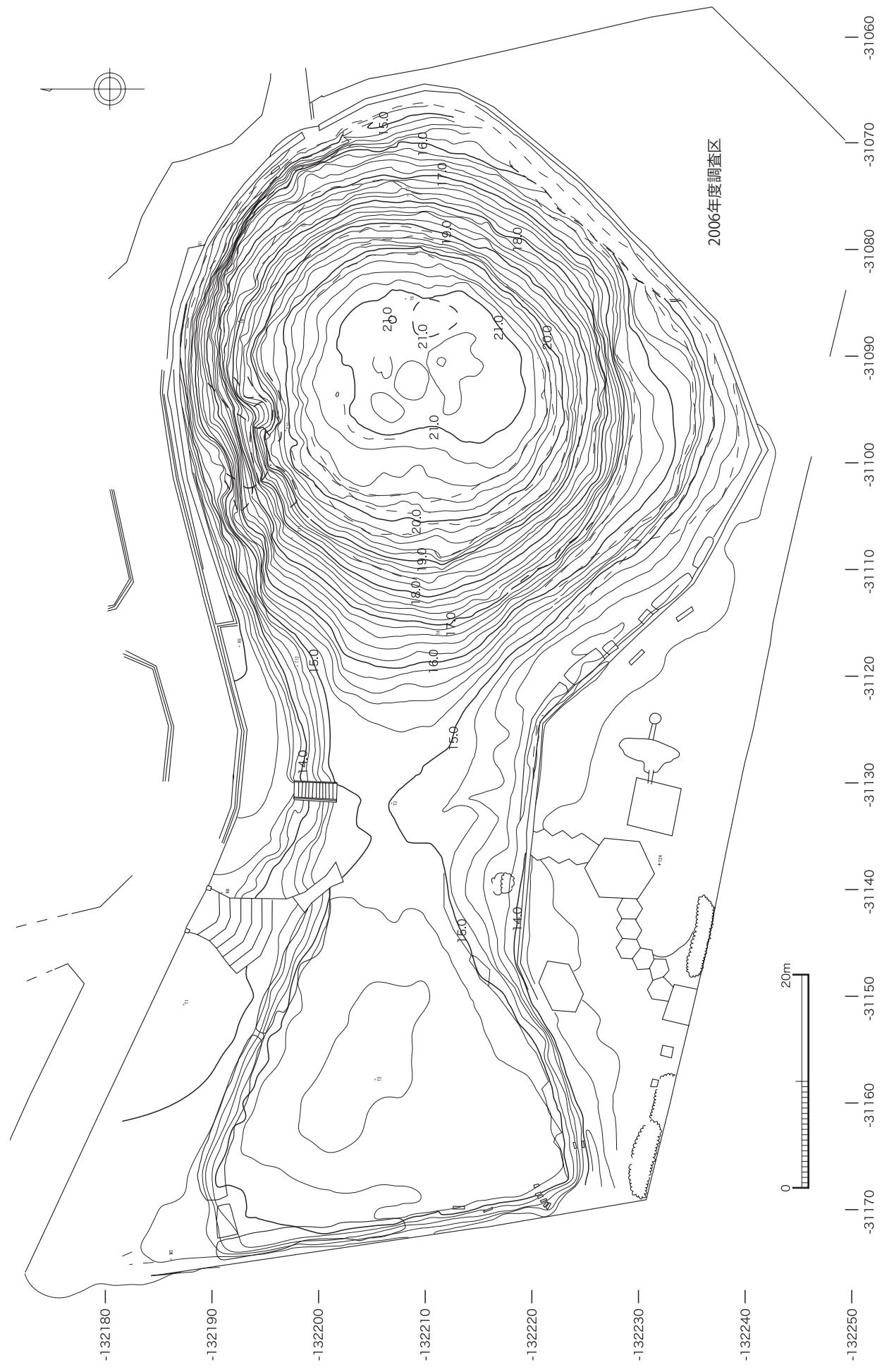


図10 禁野車塚古墳 墳丘測量図

墳丘は全体として高大な後円部に対してせまいくびれ部が設けられ、前方部にいたってやや幅を増すが上面が低平である。東の台地と墳丘の間にはもともと水田があり、独立したものであった。また北側の水田にくらべると南側の水田面は0.6m高い。周囲の水田面は周濠跡のように低くならずに、周囲より高い。墳丘は部分的な断面からみて盛土によって築成されたらしい。

この状況から、北野氏は周濠をもつことが一般化した中期に下がるほどのものでないとし、薄手の埴輪、しかも墳丘のくびれ部がかなりせばまって前方部の先端に近づくにしたがい、かえって開いていく状況を問題視し、そうした形状はたとえば箸墓古墳が同様な傾向にあると今回の所見と似た評価をした。しかし、箸墓古墳と同様な特徴について前期の典型的な柄鏡式の狭長な前方部のものと区別すべき特徴として、4世紀後半から5世紀にいたる前期後半の築造年代とした。現在では箸墓古墳の年代が3世紀にさかのぼっており、この所見からすれば、同様に古くなることになる。

## 5. 古墳の性格

さて、禁野車塚古墳の後円部墳頂や裾にある後世の井戸石材からは板石がみられる。

これは橄欖石安山岩で大阪府柏原市国分の芝山産といわれる。この石は奈良県桜井市箸墓古墳や天理市黒塚古墳などの大和東南部、産地付近の柏原市松岳山・玉手山古墳群などの前期古墳にその使用が集中するものである。この他の地域で使用されるのは京都府木津川市椿井大塚山古墳、兵庫県神戸市西求女塚古墳などに限られる(5)。

一方、北にある牧野車塚古墳では、墳丘の板石組み葺石の石材に徳島県吉野川流域産の結晶片岩・紅簾石片岩、兵庫県猪名川流域の石英斑岩、大阪府春日山産の輝石安山岩が含まれている。この石材使用の様相はその立地状況から淀川水系右岸の前期古墳と共通する。

こうした中で、禁野車塚古墳の石材は淀川水系において椿井大塚山古墳同様、異質であると言える。

芝山という石材産地と大和東南部の関係を考えると、そこには石材供給の太いパイプが考えられる。当時の遺跡の状況からすれば、芝山から大和川をくだって淀川に一旦に至り、さらにさかのぼり、天野川を上るには、そのルートを確保するまでの集団関係を必ずしも整えていたとは思えない。

むしろ、禁野車塚古墳への石材輸送は大和東南部勢力

がおさえていた大和川を上り竜田川や富雄川を経由し、天野川を下るというルートも視座に入れる必要も生じてくることになる。

東京工業大学のG I Sのシミュレーションでは、牧野車塚古墳は淀川からも眺望できるが、禁野車塚古墳の方はその淀川に流れ込む天野川下流のごく限られた地域のみであるという結果がある。ただし、この眺望性のなさは天野川を通過するときにはいやがおうでも古墳に出くわすということになる。双方から、地域内での立地の意味合いがそれぞれの古墳で大きく異なると言える。こうした古墳ごとの立地性格での違いは淀川右岸の京都府京都市・向日市の向日丘陵の前期古墳の一部や大阪府茨本市紫金山・将軍山古墳、上流の木津川市の古墳などにおいてもあてはまる可能性が高いと考えられる。

## 6. おわりに

以上のことは、淀川流域に点在する古墳は、単なる地域ごとのひとつながりの系譜関係だけでなく、あきらかに同時期の古墳間でも、それぞれの古墳自体が具現化する実際の墳丘において、きめ細かな個性をそなえ、その序列、集団関係を紐解いていくことが可能になることを示していると言える。こうした意味で、淀川水系には日本の古代国家の成立の実体を解明するうえでは欠かせない重要な初期古墳が多くそなわっていることになる。

今回、箸墓古墳などの大王級の古墳と相似形になる例が北河内においても判明したことにより、それがどのような重層関係があるのか、地域首長の関係はといった問題を解明できるものと考える。

## 注

- (1) 枚方市史編集委員会『枚方市史』第1巻 1967年
- (2) (3) 財団法人 枚方市文化財研究調査会『史跡 禁野車塚古墳 平成17年度範囲確認調査概要』2007年
- (4) 岸本直文「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林』第71巻6号 1988年
- (5) 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 1984年  
宮本繁雄「畿内前期堅穴式石槨の基底部構造と石材」『古代学研究』第175号 2006年

写真12 禁野車塚古墳  
後円部（南より）



写真13 禁野車塚古墳  
後円部からくびれ部  
(南東より)



写真14 禁野車塚古墳  
前方部から後円部  
(西より)



## 第4章

# 中臣十三塚・宮道古墳 墳丘測量調査

## 1. 山科盆地の古墳

宮道（ミヤジ）古墳の存在する山科盆地は京都府の東、京都盆地と稻荷山を一つ隔てた場所に位置する。山科盆地は東側を音羽・醍醐山地、北側を比叡山山地、西側を東山・桃山丘陵に囲まれ、南側が広がった地形になっている。その山科盆地で古墳が盛んに築造されるようになったのは、古墳時代後期、6世紀に入ってからのことであった。現在山科地区で確認されている古墳の総数は、70基以上と言われ、その大半を旭山古墳群・醍醐古墳群、そして今回調査した宮道古墳が含まれる中臣十三塚古墳群が占めている（表1）。

旭山古墳群は、東山丘陵の中央部に存在し、合計29基

の古墳が分布している。山科区から東山区にかけて、南北3km×東西2kmという広い墓域内に分布しており、A～Eの支群に分かれている。墳丘は一辺5～10mで、コの字形の周溝をもつものが多く、内部は横穴式石室と小石室が検出されている。また、旭山古墳群には追葬が見られず、単葬のみとなっている。築造年代は、出土土器などから7世紀初めから中頃と考えられている（1）。

次に、醍醐古墳群は、山城盆地の南端に所在しており、耳塚と呼ばれている1号墳をのぞいて、すべて方墳で構成されている。最も大きい1号墳は円墳で直径25m、高さ3mの規模をもち、他の方墳は一辺5～12mの規模をもっている。1号墳は6世紀後半、その他の古墳は7世紀初頭と考えられている（2）。

## 2. 中臣十三塚古墳群

中臣遺跡内に所在する中臣十三塚古墳群は、山科区の栗栖野丘陵一帯に所在した古墳時代後期の群集墳である。山科川と旧安祥寺川の合流点北側に広がる台地に位置し、

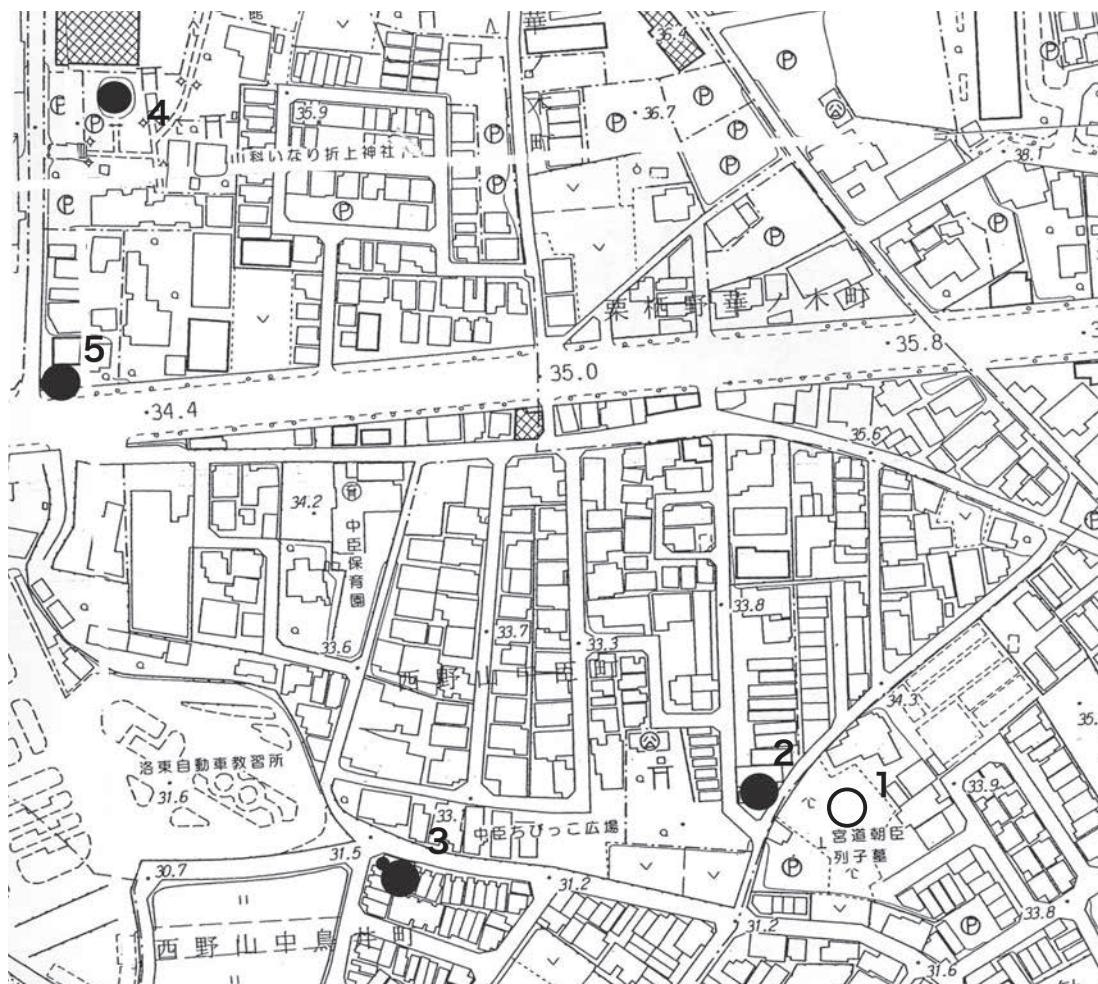


図11 中臣十三塚古墳群分布図

1. 宮道古墳 2. 3号墳（第1次調査） 3. 5号墳（第5次調査） 4. 稲荷塚古墳 5. 第70次調査

表1 山科盆地の古墳一覧

No.	古墳名	現住所	立地、墳丘規模・形態	墳形	石室構造 特記事項	主体部		追葬
1	宮道古墳	勤修寺西栗柄野町	台地 径26m 高3.5m	円墳				
2	中臣十三塚1号墳	西野中山臣町	台地	円墳				×
3	中臣十三塚2号墳	西野中山臣町	台地	円墳				×
4	中臣十三塚3号墳	勤修寺西栗柄野	台地 径8m 高1.5m	円墳	木棺		1974年発掘	×
5	中臣十三塚4号墳	西野中山臣町	台地 径8m 周溝	円墳	横穴式石室	長2.5m		×
6	中臣十三塚5号墳	西野中山臣町	台地 径14m	円墳	両袖横穴式石室	全長5.1m 玄室長2.7m×幅1.4m 羨道幅0.9m	1984年発掘	×
7	稻荷塚古墳	西野中山臣町折上神社境内	台地 径18m 高3m	円墳				
8	向山古墳	大宅向山	丘陵端 径10m 高2m	円墳	横穴式石室			×
9	旭山C1号墳	上花山旭山町	山腹 一辺9.5m ヲ字形周溝	方墳	両袖横穴式石室			×
10	旭山C2号墳	上花山旭山町	山腹 一辺6m	方墳				×
11	旭山C3号墳	上花山旭山町	山腹 一辺6.2m 高1.2m ヲ字形周溝	方墳	無袖横穴式石室	長3.4×幅0.8m	1977-78年発掘	×
12	旭山C4号墳	上花山旭山町	山腹 一辺6.2m 高0.9m ヲ字形周溝	方墳	横穴式石室		1977-78年発掘	×
13	旭山C5号墳	上花山旭山町	山腹 一辺5.3m 高1.4m ヲ字形周溝	方墳	無袖横穴式石室	長3.4×幅0.8m	1977-78年発掘	×
14	旭山D1号墳	上花山旭山町	山腹 一辺4.8m 高1.3m ヲ字形周溝	方墳			1977-78年発掘	×
15	旭山D2号墳	上花山旭山町	山腹?	方墳?	無袖小石室	長1.6m×幅0.6m	1977-78年発掘	×
16	旭山D3号墳	上花山旭山町	山腹 一辺5.8m 高1.3m ヲ字形周溝	方墳	無袖横穴式石室	長2.4m×幅0.7m		×
17	旭山D4号墳	上花山旭山町	山腹 一辺7m 高1.3m ヲ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3.5×幅0.9m	1977-78年発掘	×
18	旭山E1号墳	上花山旭山町	山腹 一辺6.5m 高1.5m ヲ字形周溝	方墳	横穴式石室	幅0.9m	1977-78年発掘	×
19	旭山E2号墳	上花山旭山町	山腹 一辺9.8m 高1.7m ヲ字形周溝	方墳	両袖横穴式石室	全長5.9m 玄室長2.4m×幅1.2m 羨道幅0.9m	1977-78年発掘	×
20	旭山C3号墳	上花山旭山町	山腹 墳丘削平	方墳?	無袖小石室	幅0.9m×幅0.4m	1977-78年発掘	×
21	旭山C4号墳	上花山旭山町	山腹 一辺6.3m 高0.7m ヲ字形周溝	方墳	無袖横穴式石室	幅0.7m	1977-78年発掘	×
22	旭山E3号墳	上花山旭山町	山腹 一辺7.8m 高0.8m ヲ字形周溝	方墳	横穴式石室	幅0.8m	1977-78年発掘	×
23	旭山E6号墳	上花山旭山町	山腹 墳丘削平	方墳?	小石室	長1.5m×幅0.6m	1977-78年発掘	×
24	旭山E7号墳	上花山旭山町	山腹 一辺5.9m 高1.1m ヲ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3m×幅0.9m	1977-78年発掘	×
25	旭山E8号墳	上花山旭山町	山腹 墳丘削平	方墳	小石室	長1.7m×幅0.4m	1977-78年発掘	×
26	旭山E9号墳	上花山旭山町	山腹 一辺6.4m 高1.6m ヲ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3.9m×幅0.9m	1977-78年発掘	×
27	旭山E10号墳	上花山旭山町	山腹 一辺6.5m 高1.6m ヲ字形周溝	方墳	無袖式横穴式石室	長3.7m×幅0.8m	1977-78年発掘	×
28	大岩古墳	御陵安祥寺町	丘陵稜	円墳?	横穴式石室?	石材露出 四形状に岩が存在する		
29	大宅古墳	大宅鳥居脇町大宅廃寺境内	扇状地 径13m	円墳	両袖横穴式石室	玄室長3.3m×幅1.4m 羨道幅0.9m	1958年発掘	
30	花山古跡古墳	川田山久ノ上	台地端	円墳				
31	中島古墳	西野中山島井町	半地					
32	醍醐1号墳(耳環)	醍醐内ヶ戸井	丘陵稜 径25m 高3m	円墳	両袖横穴式石室・無袖式横穴式石室	玄室長3.7m×幅1.7m 長3.5m×幅1.1m	1980-86年発掘	
33	醍醐2号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵稜	方墳?	無袖式横穴式石室		1980年発掘	
34	醍醐3号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺8.7m	方墳	小窓穴式石室	長1.7m×幅0.4m	1980-85年発掘	
35	醍醐4号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 痕跡のみ	方墳?				
36	醍醐5号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹	方墳?				
37	醍醐6号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹	方墳?				
38	醍醐7号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹	方墳?				
39	醍醐8号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺6m	方墳	無袖式横穴式石室 床面石敷	残長3.5m×幅0.9m	1985年発掘	
40	醍醐9号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺7m	方墳	無袖式横穴式石室 精台石	残長4.9m×幅0.9m	1980-85年発掘	
41	醍醐10号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺10m	方墳	片袖式横穴式石室	玄室長2.5m×幅1.3m 羨道幅1.1m	1985年発掘	
42	醍醐11号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺12.5m	方墳	両袖式横穴式石室	玄室長2.5m×幅1.5m 羨道幅1.3m	1985年発掘	
43	醍醐12号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺10m	方墳	無袖式横穴式石室 精台石	残長2.7m×幅1.3m	1985年発掘	
44	醍醐13号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺4.6m	方墳	無袖式横穴式石室	長3.8m×幅1m	1985年発掘	
45	醍醐14号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺11m 高1.5m	方墳	無袖式横穴式石室	残長3.9m×幅1.2m	1984年発掘	
46	醍醐15号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹	方墳?	無袖式横穴式石室 床面炭層	長1.1m×幅0.5m	1984-85年発掘	
47	醍醐16号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹	方墳?	小窓穴式石室	残長2.1m×幅0.7m	1984-85年発掘	
48	醍醐17号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺10m	方墳	無袖式横穴式石室	残長3.5m×幅1.4m	1984-85年発掘	
49	醍醐18号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹	方墳?	小窓穴式石室 敷石	長0.9m×幅0.5m	1984-85年発掘	
50	醍醐19号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹	方墳?	小石室	長0.6m×幅0.5m	1984-85年発掘	
51	醍醐20号墳	醍醐内ヶ戸井	丘陵腹 一辺3.5m	方墳	無袖式横穴式石室	長2.4m×幅0.7m	1984-85年発掘	

文献『京都市遺跡地図台帳』第8版 2007年

おもに旧安祥寺川に面している。名前のつけられた当初は13基の古墳の墳丘が良好に遺存して群集していたのか、それとももっと多かったのかはさだかではない。近世までは、13基の古墳が確認されていたという説、何十基とあったという説など様々あるが、真偽はわからない。

現在、その当時の姿がうかがえる古墳は、折上神社の境内に残る稻荷塚古墳と、今回、測量調査を行った宮道古墳の2基のみで、半壊したものが3基、どの古墳も円墳であることが調査からわかっている。本来は、さらにはあったものと考えられているが、現在は後世の宅地造成などにより古墳の多くが半壊または消滅した。調査では、どの古墳も横穴式石室をもっていたと考えられている。それらの古墳の規模には差があり、宮道古墳が直径25mに対して、稻荷塚古墳18m、他の古墳で7~14mの大きさとなっている（3）。

図11中にある宮道古墳の西側で行われた第1次調査では東西に0.8~0.9m、南北2.5mの石室の基底部とそれを中心として直径約7mの円形に周囲をめぐる周溝が發

見された。また、宮道古墳の西側100mの地点で行われた59次調査では石室に使われた石材の抜き取り痕と径13~14mの周溝が検出された。石材の抜き取り痕から石室を復元すると、両袖式の横穴式石室で、玄室幅1.4m、長さ2.7m、羨道幅0.9m、長さ2.4mであることがわかった。稻荷塚古墳は完存しており、直径18m、高さ3mの円墳である。また、宮道古墳の北西、稻荷塚古墳から南へ100mのところには以前から石材が露出する小さな高まりがあることが知られていた。そこで行われた70次調査によって片袖式の横穴式石室をもつ古墳であることがわかった。しかし、墳丘は大幅に削られており、規模・形態などは不明である。石室は基底部の部分などが元の位置を保っており規模は玄室幅1.7m、長さ3m以上、石室床面には5~10cm程度の礫が敷き詰められていた。これらの古墳の年代は出土土器などから、宮道・稻荷塚古墳が6世紀後半、他の古墳が7世紀初頭と考えられている（4）。

### 3. 宮道古墳の概要

宮道古墳は、山科区勧修寺西栗栖野町に所在している。現在の状況からも円墳であることがよくわかり、周溝も見られるが、北半分は斜面と周溝が削平され、道路と住宅が建っている。醍醐天皇の生母である藤原胤子（インシ・タネコ）の母、宮道列子（レッシ・タマコ）の墓であると伝えられている。

墳頂部の中心には宮道列子の墓が建てられており、墓石の表、東側の面には4行で「贈正一位宮道朝臣列子墓

／東西拾四間半／南北拾六間／延喜七年十月十七日薨／明治二十三年十一月建立」と彫られている。また、その墓石の裏には8行で「延喜帝御外祖母／贈正一位宮道朝臣列子尊靈／壹千百年忌追善御菩提ノ為／平成十九年十月十六日之ヲ／建立シ奉ル／藤原北家末裔功徳主／宮道神社信徒功徳主／大本山勧修寺門跡」と書かれている。墳頂東側にある石碑には13行で「当列子様ノ御陵ハ明治維／新ノ頃ニ私有地トナリマシタガ／昭和八年九月ニ勧修寺官旧臣／ノ永田重泰氏ガ当寺へ寄進シテ／下サイマシタ／コノ度大宅寺ニ奉安サレテ居ル／列子御両親様ノ



図12 宮道古墳 墳丘測量図

塔ト同寸ノ塔／ヲ石匠（有）山本石材店ニ建立願／イココニ奉安致シマシタ／尊靈ノ永久ニ安カラナルコトヲ祈願／シ奉リマス／平成十九年十月吉日／勸門主 常遍敬白」と書かれている。

宮道古墳は先述したように、6世紀後半に築造されたとみられているが、列子の没した延喜7年10月17日、西暦では907年という年代となり築造年代に差がある。そのことからすれば、後世に元々存在した墳丘を利用して墳墓とした可能性があると考えられている。1980年2月には橋女子大学の研究会が踏査を行い、墳丘にて須恵器の破片を採集しているとしているが、現在その資料が見つからず、確認は得ていない（5）。

#### 4. 調査の概要

今年度8月18日から23日に現地にて3台の平板を使用し、測量調査を本学で実施した。

今年の調査では、墳丘内にて20cmコンタによる縮尺1/100の平板測量を行った。世界測地系で基準杭を南北2ヶ所に配置しそれを中心にして他の杭も11本設置した。墳頂南側に置いた基準杭1はX=-114225.630、Y=-17761.028、高さ35.615m、また、墳頂北側の基準杭2は、X=-114218.520、Y=-17755.928、高さ35.960mである。測量した範囲は南北45m、東西49mとなった。中臣十三塚古墳群の中では墳丘最大で、従来のデータでは直径26m・高さ約3.5mとされていたが、今回の調査で、墳丘幅は、南北32m、東西35mとなり、T.P.32.600mのコンタ付近を墳丘裾、T.P.35.908mを墳頂

と考えると、高さ3.3mとなった。また、周溝の幅が2.2～2.7m、深さは溝の中に倒れた竹がはまっていたため、一番底まで測量できなかったところもあるが、少なくとも周溝の外肩の部分から深さ約1.7mはあることがわかった。

墳頂部から墳丘南西側に向かって地面が落ち込んでおり、盗掘、もしくは石室内部が崩れたことによる落ち込みかと思われているが、実際、発掘調査が行われておらず主体部内部の詳細はわからない。ちなみにこの落ち込みの方向と周囲で検出された石室の方向を比べてみると、各古墳の石室開口方向はそれぞれ、第1次調査のものはN-110°-E向き、第59次調査のものはN-115°-Eの方向に向く。そして、宮道古墳の今回の測量調査図を検討すると、落ち込みの開口方向がおおむねN-130°-Eを向いており、中臣十三塚古墳群の石室開口方向の中では宮道古墳の落ち込みは南向きが強いことになる（6）。

#### 注

- (1) 京都市埋蔵文化財調査研究所『旭山古墳発掘調査報告書』1983年
- (2) 京都市埋蔵文化財研究所『醍醐古墳群発掘調査概報 昭和60年度』1986年
- (3) 中臣遺跡調査団『中臣遺跡 1974』1975年
- (4) 京都市埋蔵文化財研究所「中臣十三塚」『つちの中の京都』1996年
- (5) 京都橘大学考古学研究同好会『山科分布調査概報復刻版第1次～第5次』2008年
- (6) 京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概報 昭和59年度』1985年



写真15 宮道古墳  
墳丘西側(西より)



写真16 宮道古墳 墳頂南側  
(西より)



写真17 宮道古墳 墳頂北側  
(西より)



写真18 宮道古墳 墳丘南側周溝  
(東より)

## 第5章

# 大宅廃寺瓦窯跡 地形測量調査及び窯体実測

### 1. はじめに

大宅廃寺瓦窯跡は京都市山科区に位置する（図17）。現在京都市内で確認されている瓦窯跡は29ヵ所である（1）。そのうち、伏見区法琳寺瓦窯跡については本学によって発掘調査を行い、2007年に報告書を発行している（2）。

### 2. 歴史的環境

山科における須恵器生産は2つのグループに分かれ、大岩須恵器窯跡・天智天皇陵付近須恵器窯跡・牛尾須恵器窯跡・日ノ岡堤谷須恵器窯跡が御陵古窯群、大峰須恵器窯跡・朝日稻荷須恵器窯跡・坂尻須恵器窯跡が花山支群と呼ばれている。おそらくこれらは6世紀から8世紀初頭まで断続的に操業されていたらしく、その間、京都岩倉の窯のように瓦陶兼用窯ではなく一貫して須恵器のみを焼いていた。窯跡の製品は同時操業の窯は1・2基程度の小規模な地方窯であった（図17）。



図13 大宅廃寺瓦窯跡と大宅廃寺境内瓦窯

須恵器窯から派生した瓦窯は山科においては奈良時代に出現する。本窯跡付近には小栗栖瓦窯跡・法琳寺瓦窯跡・醍醐寺瓦窯跡が位置しており、奈良時代から平安時代を中心としている。これらの瓦窯はいずれも遺物、立置から見てそれぞれの寺院と関係が深いことから、それらの寺院への目的供給のためのものと考えられている（3）、（図13）。

### 3. 既往の調査

大宅廃寺については様々な調査研究がなされている。1919年に西田直二郎氏の報告があり、平安時代に宮道氏によって営まれた「大宅寺」と考証している。翌年に梅原末治氏は京都大学蔵の大宅廃寺出土瓦にある線の表現力などを根拠とし、白鳳期の「山階寺」とする見解を述べている。

その後、1958年には京都府教育委員会による名神高速道路建設予定地事前調査（第1次発掘調査）が行われた。この調査では中央建物、北方建物、その他の建物、一直線上に続く瓦の堆積などが見つかっている（4）。1985年には京都市埋蔵文化財研究所による京都市立大宅中学校建設に伴う発掘調査（第2次調査）が行われた。この時の調査では、北東で基壇建物、伽藍や寺域の区画を示す遺構、掘立柱建物などが見つかった。南側では谷が入って下がる（5）。そして1991年には京都市埋蔵文化財研究所による下水道の敷設替え工事に伴う立会調査（第3次調査）において大宅廃寺境内に位置するロストル式平窯と思われる瓦窯が1基発見され、大宅廃寺境内瓦窯と名づけられた（6）。また平方幸雄氏によって伽藍配



図14 大宅廃寺関係 既往調査位置図

置や存続年代など大宅廃寺瓦窯跡の問題点が整理された(7)、(図14)。

一方で大宅廃寺瓦窯跡は周知されてはいたものの実際の発掘調査などは行われていない。1938年、田中重久氏によって確認され(8)、1982年に橋女子大学考古学研究会が踏査を行っている(9)。そして1985年京都考古学研究会によって測量調査が行われた(10)、(図15)。

#### 4. 調査の目的

今回の調査は1985年に京都考古学研究会が行った調査を踏まえ、瓦窯内実測及び地形測量を行った。前調査から約23年たった現在どのように窯内部及び付近地形が変化しているのかを調査するとともに、付近地形を20cmコンタでとることでより詳しく見ることにより、付近にセットとなるような他の窯体がないかといったことに調査目的の重点を置いた。

#### 5. 1985年調査内容

ところで1985年2月12日から22日に調査を行った京都考古学研究会が行った報告がある。そこで記述をまとめると、窯体付近は竹林におおわれ、山の斜面に立地する。窯の焚口部、焼成部の前部及び中央部は削平により観察することは不可能である。焼成部の後部の残存長は約0.9mであり、横断面プランは幅約1.3m、高さ約1.2

m。やや角ばった円形を呈し、平面プランは長楕円形と考えられ、窯体の傾斜角度は28~20°である。奥壁と呼ばれる部分を含んだ煙道は二重構造で、下方は径約37cm、上方は約25cmとなる。煙道口は石がはめ込まれているという記述があり、窯内部から確認できている。想定では煙道の長さは約2.0m、高低差約1.5m、傾斜角度は65~58°となっている(図15・16)。

#### 6. 今年度の調査内容

今回の調査では測量のためのポイントを9点、設定した。まず基準点としてH1とH2を設けた。H1はX=-114777.124、Y=-16327.287、H=52.192、H2はX=-114778.968、Y=-16317.148、H=47.986である。H1とH2の間隔は10.313mとなっている。このH1から5m山手にH0を設けてHラインを設定した。このHラインから北へ5m間隔でIライン、Jラインにした。すなわちH0から北5m間隔でI0、J0。H1から北5m間隔でI1、J1。H2から北へ5m間隔でI2、J2、それぞれ3ポイントづつとなる(図15)。

その結果、窯跡付近南北53m、東西23mの1219m<sup>2</sup>の測量を完了した。そして併行して窯跡内部の実測と断面図を行った。地形測量では1985年の調査が50cmごとのコンターラインであったことから、丘陵地形の細かい変化を見るため付近測量は20cmごとで行った。その結果、標高

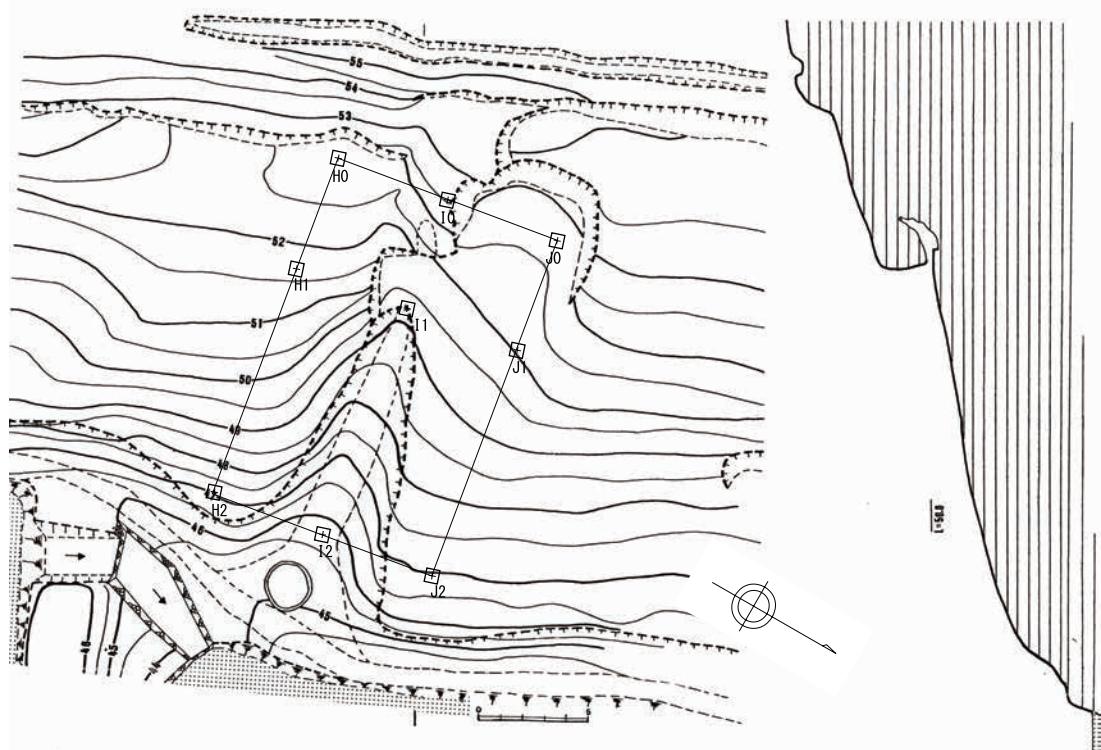


図15 大宅廃寺瓦窯跡 基準点設定図(下図は京都考古学研究会より)

53.200mから44.200mの範囲と、窯跡内部は平面図及び断面図が終了した。

付近の地形や窯内部に前述の調査時点と現状では大きな改変は見られないものと思われた。

しかし煙道口に投げ込まれたとされている石は窯内部、外部のどちらからも確認できなかった。そして窯内部は土で埋もれていた。

## 7. おわりに

今年度の調査ではH 1とH 2間斜面左側と南北それぞれの両端15mの測量と窯跡内部の左右の断面実測が未完了になった。

そのため、来年度も調査を継続してこの部分を調査するとともに、付近測量の範囲をできる限り東西に広げていきたいと考えている。来年度は明確な見解を示すことができるような調査を行いたい。

### 注

- (1) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 2007年
- (2) 京都橘大学文学部『法琳寺跡発掘調査報告』2007年
- (3) 橘女子大学考古学研究会『山科分布調査総括概報』1983年
- (4) 坪井清足「大宅廃寺の発掘」『仏教芸術』第37号 毎日新聞社 1958年
- (5) 平方幸雄・菅田薰「大宅廃寺」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- (6) 竜子正彦・尾藤徳行「大宅廃寺・大宅遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成3年度 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- (7) 平方幸雄「山背・大宅廃寺に関する二、三の問題」『杉山信三先生米寿記念論集平安京歴史研究』杉山信三米寿記念論集刊行会 1993年
- (8) 田中重久「平安遷都前の寺跡と其出土瓦」『夢殿論誌』18 鶴故郷舎 1938年
- (9) 橘女子大学考古学研究会『第5次山科分布調査遺跡台帳』1982年
- (10) 京都考古学研究会『京都考古学研究会第11次分布調査概報』1985年

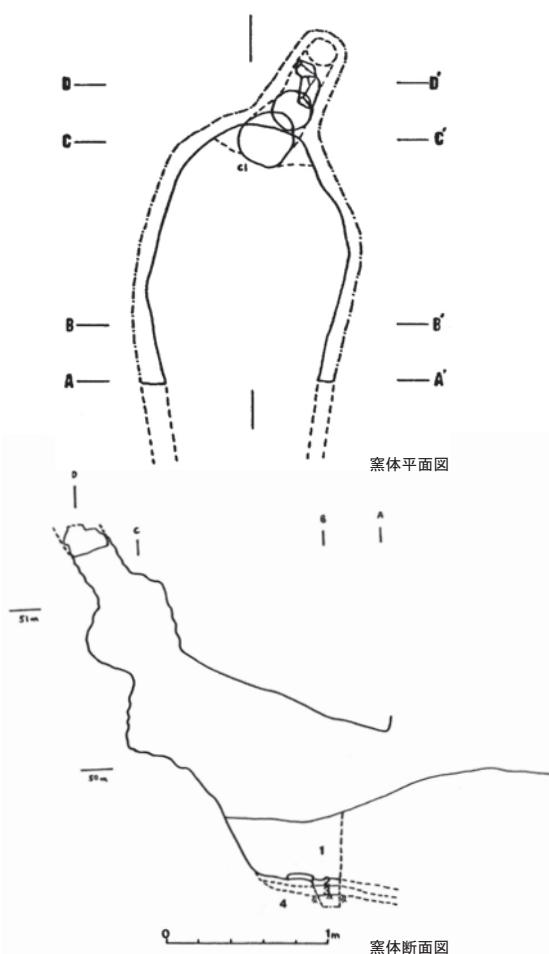


図16 大宅廃寺瓦窯跡 窯体図（京都考古学研究会より）

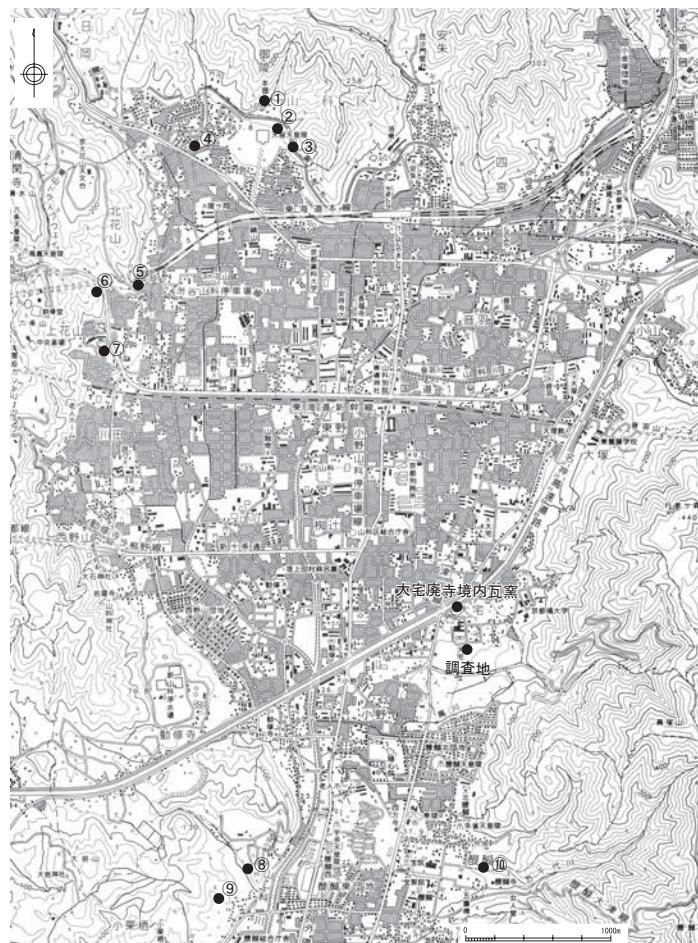


図17 山科盆地の窯跡分布



写真19 大宅廃寺瓦窯跡  
窯残存状況（東より）



写真20 大宅廃寺瓦窯跡  
窯体焼成部後部（東より）

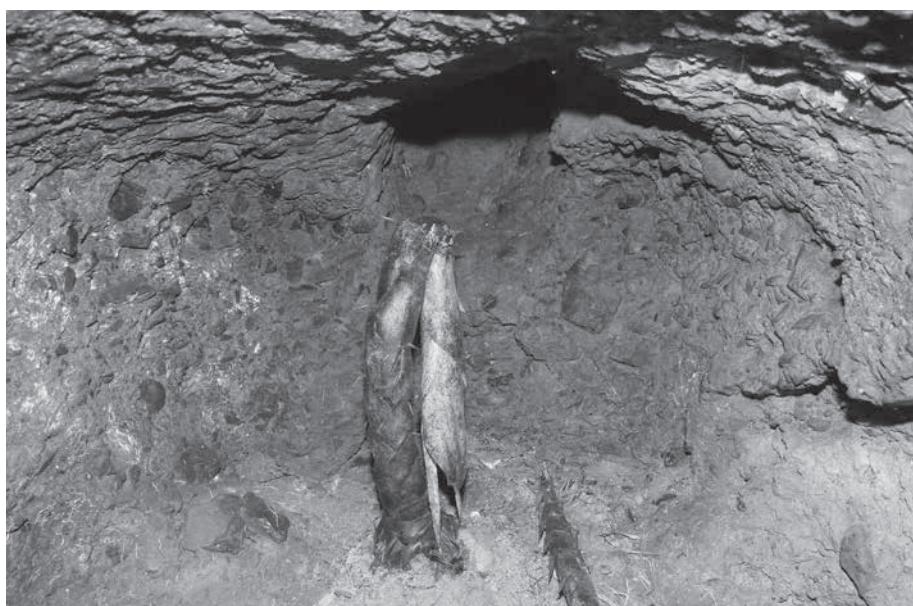


写真21 大宅廃寺瓦窯跡  
窯体内部（東より）

## 第6章

# 前方後円墳周濠の渡土堤について

## 1. はじめに

日本の古墳には、墳丘の周りに水を湛えた周濠がある。古墳の築造時に墳丘の周りを掘り盛土するため、溝が必然的にできるが、それをわざわざ整備して水を張る意識のあるものは、中国や朝鮮半島では見られない。日本独自のものと言ってもいいだろう。周濠を持つ古墳は、奈良盆地と大阪平野を中心とする近畿中央部の大型古墳によく見られる。しかし、近畿地方を出るとその数は減少する。

古墳時代前期、特に4世紀に造られた古墳は自然の地形を利用し、丘陵の末端部や丘陵の頂部を用いられた。丘陵末端部を利用するものが周濠があることが多いが、末端部を使用した場合には周濠を階段状に仕切らなければ水が溜められないので、この頃は周濠を後の時代の後補と考える研究者は少なくなかった〔堅田1971〕。

渡土堤は丘陵末端部を利用した古墳に多く見られる。墳丘基底部が水平に揃えられていないため、前方部と後円部の基底線は高低の差をもつ。その状態では水を溜めることができず、階段状に周濠を作り、ダムのようにして作る。その役割を果たしているのが渡土堤である。

また、他の利用方法としては石室の石材や埋葬品等を運ぶ通路として使われたという考え方もある。前方部の意義として祭祀を行った場とするならば、周りに濠が廻っていては不便であるため、浜田耕作氏は前面の一部分は、はじめは少なくとも外方に連結していたのではないかと考える〔浜田1936〕。都出比呂志氏は四隅突出型墳丘墓の突出部は埋葬部に至る「道」が祭祀行為の中で特別の意味を持ち、突出部として発達していったと考える〔都出1979〕。本来、弥生時代には陸橋となる渡土堤状のものが備わっていたことになる。

しかし前期の周濠自体が後補で、同様に渡土堤も後補と永く考えられていた。そもそも江戸時代の改修は農業用水としての水源を確保するために周濠を修繕した経緯もある。それまで高低差によって滞水機能をもっていなかった周濠に渡土堤を作ることによりそれを可能にした、という見方が多かったのである。

最近では周濠及び渡土堤の発掘調査も行われるように

なってきたが、未だ渡土堤に関する詳しい研究はない。丘尾切断方法による築造の仕方より渡土堤が築かれるものという認識はあるが、渡土堤の取り付き方のパターン化などの型式的な話は今まで論じられてこなかった。そこで、本論では渡土堤の型式別けや周濠・周溝に於いての違いなどについてみてみようと思う。

## 2. 周濠と渡土堤の現状と問題点

### (1) 周濠研究の現状

前方後円墳の墳丘に対する研究は江戸時代より行なわれたが、周濠自体は前方後円墳に付随する形となり、周濠のみで研究される事はなかった。また渡土堤に関して述べた研究者も数少ない。

森本六爾氏は前方後円墳の形態を完成以前期・完成期・完成以後期と3つに分けた。そして、周濠は完成以前期に発現し、完成期に整美な形となり、二重三重の濠がめぐる。しかし完成以後期になると次第に希薄となり、減少していくとした〔森本1929〕。

浜田耕作氏は丘尾切断説を取る。丘陵を利用し造られる古墳は水を湛えた広い濠をめぐらす事は困難であるとし、はじめは単に狭い周溝と土塁をめぐらした程度であったと考えた。現在のような周濠が作られたのは平地に築造された後、通水の便も良くなつてからだとする。しかし、前方部が濠により遮断されていては、祭儀を行なう際に非常に不便であり、前面の一部は少なくともはじめは外方に連結していたと推察する〔浜田1936〕。

小林行雄氏は墳丘裾のアウトラインに関して頓着していないと考えており、封土と周囲とをはっきり区別する濠ができたのも、それが地域を画するための物で形を画するものではないとした。よって、傾斜によつていくつかに区分され水面の高さの違う濠となるのも故意ではなく、墳丘裾に頓着しないがために起こったと考えている〔小林1937〕。

上田宏範氏は、周濠は中期からとして前期の周濠はめぐったとしても中期のような整ったものではなく、周溝かあるいは階段状の濠であるのが大きな特色だとする〔上田1969〕。また、小林氏と同様に墳丘裾に明確な境もなく自然の山丘に続いているとし、平地に造営された大型前方後円墳になると総合的な築造計画が事前に樹立されていなければならないとした。また、周濠の発現は古墳の基底部プランに対する注意を著しく喚起したのだと考えている。そして、築造企画のモデルプランを根底としてそれぞれその時間や場所に応じた計画が立てられ

たのではないかとしている〔上田1950〕。

堅田直氏は前期の前方後円墳の立地は自然地形の利用であって、平野に臨む丘陵の末端部、丘陵の頂部等に位置しており、丘陵末端部を利用しているものの方が丘陵頂部利用のものより古いものが多いとした。丘陵頂部に営まれた古墳にはまだ濠らしいものではなく、そして行燈山古墳（崇神陵）のような階段状の周濠は築造当初から計画されたものではないと述べる。また、渋谷向山古墳

（景行陵）の周濠は行燈山古墳に比べて幅が狭く、多くの渡土堤を造り墳丘の形にそった形態をしている。これは行燈山古墳に比べて墳丘の基底部の平坦面が狭く、V字形の溝状になり、後に濠とするため手が加えられるが、景行陵の方が築造当時の原形に近いと考える〔堅田1971〕。

これまでの研究では一往に周濠の出現は中期からとし、前期の古墳に計画性がないと考えた。周濠があったとしても、築造計画がないために水面の高さの違う周濠か、ただ土壘をめぐらせたものであるとした。

これらの研究は未だ陵墓の発掘調査が行われていなかった段階のものであり、1977年の渋谷向山古墳の発掘において、原初のものと思われる葺石や築堤当初からの池沼堆積土が確認されている〔書陵部1979〕。また行燈山古墳は1975年の調査で後円部の背後部分で原初のものと思われる葺石が見つかり、これを覆う池沼堆積土中から布留式の土師器壺が検出されている。このことより、後円部背後部分の濠は水が溜められていたことがわかつている〔書陵部1977〕。

## （2）既往の周濠分類と渡土堤研究

ところで古墳の周濠の類型化は白石太一郎氏がはじめて行ったといえる。白石氏は近年の調査結果により、行燈山古墳・渋谷向山古墳などの周濠や渡土堤が築造当初からあり、これらの周濠は他の大型古墳の成立過程を考察する上で重要な意味を持つと指摘する。

また、周濠の構築が当時の河川灌漑や治水工事の技術と無関係ではなく、首長たちが灌漑や治水工事に大きな関心を示すものだと述べる。しかしながら、周濠の水が灌漑用水としての機能を持っていたかどうかについては、古墳時代に灌漑用水が普遍化していたとは考えられず、周濠の構築にそうした目的があったとは考え難いとする〔白石1983〕。

こうした論の展開の中で、白石氏は周濠の構造や平面形態より6つの類型に分けた。

1つ目は渋谷向山型。天理市渋谷向山古墳や行燈山古墳にみられるもので、墳丘の両側を堰きとめたいいくつかの階段状の小濠をめぐらすもの。その輪郭は前方後円墳の墳丘の輪郭に近いものであると考える。2つ目は佐紀御陵山型。奈良市佐紀陵山古墳（日葉酢媛陵）を標識とするもので、渋谷向山型の周濠が形態的に整備され、平面は馬蹄形の外郭線をもち、かつ立面的には2～3段の異なる高さの水面の濠からなるもの。3つ目は宝来山型。奈良市宝来山古墳（垂仁陵）の周濠のように同一水面で外側の輪郭線が前方後円墳形を呈するもの。4つ目はウワナベ型。同一水面で外側の輪郭が馬蹄型を呈するもの。近畿地方の大型古墳の周濠ではもっとも普遍的な類型である。また同じ馬蹄型でも、奈良市ウワナベ古墳のように後円部の両側部分と前方部前面部分の幅がほとんど同じものから、土師ニサンザイ古墳のように前方部前面が著しく開くものまで様々である。5つ目は西山塚型。天理市西山塚古墳を標識とするもの。墳丘の周りに水面の高さを異にする4つの濠をめぐらすが、平面の外縁輪郭は盾形を呈する。6つ目は市尾墓山型。周溝と外堤をめぐらすもの。

以上の類型が、基本的には最も初源的な渋谷向山型から、佐紀御陵山型または宝来山型をへて定型化したウワナベ型が出現し、さらに西山塚型や高取町市尾墓山型へと変化したとする。

この分類については、近年各地で判明してきた周溝をその類型に組み込めていないことや、明確でない区分もあり、細部で変更の余地があるようと思われる。

また、弥生時代終末期の墳丘墓からも渡土堤が窺える。四隅突出型墳丘墓以外にも、総社宮山古墳や千葉県神門4号墓の例がある。これらの円形墳丘の突出部先端に溝や貼石がないのは偶然ではなく、墳丘と墳丘外とを結ぶ「通路」としての機能が明確に意識されていると推察される。この段階では突出部が前方部に似た形状を示しても、何らかの祭祀行為がなくとも、「道」としての機能はもっていた。しかし、前方後円墳となり前方部が祭祀的で重要な役割を有する「方形壇」に転化し独立すると、その「道」としての意義は失われたと考える〔都出1979〕。

このことは墓本体の一部と「道」として残されたものがあることを示唆する。こうした機能は想定されてはいるが、現実にはその役割を果たす可能性のある渡土堤の本質的な研究もないに等しい。

これまでの研究をふまえ、本論では白石太一郎氏にな

らい水を湛える機能をもつものを「周濠」それ以外の空堀を「周溝」と区別してよぶこととする〔白石1983〕。また渡土堤の呼称も様々で、他に土橋・陸橋等とよばれるがその定義分けはなされていない。そこで本論では統一して渡土堤とよぶこととする（1）。

### 3. 周濠（溝）形態の分類

#### （1）分類試案

白石太一郎氏が周濠を類型的に分けたが、佐紀陵山型と西山塚型の区別が付けづらい点や、また周溝のものをその1類型としていて分類に組み込まない点、そしてウワナベ型について前方部側の幅が後円部側と同程度のものと広がるもので類型が分かれないと細分できる可能性のある事柄を含む。そこでここでは墳丘本体周囲の状況をより詳しく検討するために、筆者なりの分類案を周溝も併せて新たに組むことにした。

まず周濠（溝）の型式を2つに分類した。1つは墳形に沿った鍵穴形。もう1つは多くみられる盾形である。鍵穴形は周濠（溝）の形が墳丘と同じように鍵穴形になっているもの。盾形は外側の輪郭が盾形に整えられているものである。

さらに細分化すると以下のようになる。

**鍵穴形I型式**－渡土堤が付き墳丘裾まわりが階段状になっているもの。

丘陵地形利用により高低差が生じるため、渡土堤を用いて周濠（溝）を階段状にしたもの。古墳にそうように渡土堤が配置されるため、その形は墳丘本体に沿って外縁が鍵穴形になる。渋谷向山古墳（景行陵）や行燈山古墳（崇神陵）に例が見られる。

**鍵穴形II型式**－同一水面のもの。

鍵穴形I型式と同じく鍵穴形である。丘陵地より平地に造られるようになり、その基底部は整えられ、同一水面になる。一部後世の改変が加えられて詳細は不明であるながらも、宝来山古墳（垂仁陵）に例が見られる。

**盾形I型式**－渡土堤が付くもの。

周濠が盾形で渡土堤が付くもの。渡土堤が付くものは墳丘の周りを濠が取り囲むため、その形は鍵穴形である場合が多いが、この型式では周濠外縁が盾形として形成されるが、渡土堤が付く。佐紀御陵山古墳（日葉酢媛陵）は周濠の形は盾形であるが、周縁の比高差が約9mあるので、渡土堤で調節する。

**盾形II型式**－前方部側の幅が後円部側と同程度のもの。

後述の盾形III型式と違い、前方部側の幅が後円部と同

程度のもの。ウワナベ古墳や大仙陵古墳（仁徳陵）など中期に多くみられる。

**盾形III型式**－前方部側の幅が後円部側より広いもの。

基本的には盾形II型式と変わらないが、前方部自体の幅が広がっていくにつれ、周濠の前方部側の幅も後円部側よりも広がる。土師ニサンザイ古墳や河内大塚古墳などにみられる。

**盾形I'型式**－渡土堤が付くが、その形は盾形III型式になっているもの。

盾形I型式は盾形II型式と同様前方部側の幅が後円部側と同程度のもので、盾形I'型式は盾形III型式のように前方部側の幅が広いものとする。白髮山古墳（清寧陵）や平田梅山古墳（欽明陵）が例に見られる。

以上、大きく2類、全体で6型式に分けた。

白石氏の分類では渋谷向山型の階段状周濠から宝来山型の同一水面へと分類されている。それなら鍵穴形は階段状周濠と同一水面で分類した。しかし、現時点では鍵穴形周濠で渡土堤を持たないものは宝来山古墳以外に例がなく、唯一の型式となる。

盾形は中期に多くみられることや、古墳の造営が丘陵地から平地へと移った事により前期に比べて高低差を伴わなくなり、外堤を確実に設けようとしたため、高低差が顕著に現れなくなっている。そのことから、同一水面であるか否かは省いた。

また、前方部側部分の幅の広さに関係なくウワナベ型となる。しかし同じ盾形であっても、幅が広がるものとそうでないものでは、その外側輪郭線の形が大きく異なるので盾形II型式と盾形III型式で分けることにした。

#### （2）分類の時間推移

試みた分類を時間の推移でみると以下の通りになる。

まずは、鍵穴形I型式と盾形I型式。当初は箸墓古墳のように平地形に築いたが、古墳時代前期において丘陵地に造営される傾向にある〔末永1975〕。それらは奈良盆地東南部にある柳本古墳群や同じく奈良盆地北部の佐紀盾列古墳群、その西群に多くみられる。柳本古墳群は渡土堤を持つ行燈山古墳や渋谷向山古墳だけではなく、西殿塚古墳（手白香皇女陵）や櫛山古墳など多くの古墳が丘陵性立地の影響を受けている。

また、佐紀盾列古墳群も奈良盆地にあるが、平城山の丘陵の末端部であり、五社神古墳や佐紀御陵山古墳などがそれである。

これらの古墳群だけではなく、実は中期になり造営地

が台地に移ってもみられ、前期に見られる古墳ほど顕著ではないが渡土堤が観察される。

これら渡土堤の付くものは後で詳しく検討をする。

鍵穴形Ⅱ型式は、奈良盆地の宝来山古墳に見られるものである。他の佐紀古墳群に比べ南西にはずれ、あまり丘陵の影響を受けなかつたために同一水面になし得たと思われる。ただし、この時には奈良県広陵町巣山古墳、大阪府藤井寺市津堂城山古墳は完全な盾形となつてゐる。

盾形Ⅱ型式は一番普遍的な形で、大仙陵古墳や上石津ミサンザイ古墳（履中陵）をはじめ、古墳の大小問わず見られる類型である。その分布は百舌鳥・吉市両古墳群をはじめ、奈良盆地でもみられ多岐にわたる。またこの型式になると、大仙陵古墳のように2重・3重の周濠がめぐる例も見られるようになる。

また、中期から後期にかけて、前方部の幅が広がっていく傾向にある。それと同時に周濠の幅も広がり、盾形Ⅲ型式になる。しかしその分布は盾形Ⅱ型式と違い、吉市古墳群の丘陵沿いに多く見られる。それ以外には土師ニサンザイ古墳や今城塚古墳、奈良盆地では狐井城山古墳や北花内大塚古墳（飯豊陵）にみられる。

ただし、岡ミサンザイ古墳（仲哀陵）のように墳丘の前方部が開いていても、周濠は盾形Ⅱ型式のものもある。

## 4. 渡土堤の諸形態

### (1) 渡土堤の事例

周濠をもつ古墳は主に近畿、特に奈良盆地と大阪平野に多い。墳丘を造る際に周りを掘るため必然的に周溝はできるが、わざわざ整備して水を溜めるものは近畿中央部を出ると一気に減少する。その中でも渡土堤を持つものは限られてくる。また、その多くが陵墓に指定されているため、江戸時代末の文久に改修を受けている。そのため、まず築造当初のものとその改修時に付け加えられているものとを振り分けなければいけない。

奈良県天理市の柳本古墳群には典型的な渡土堤を持つ2基の大型前方後円墳がある。それが行燈山古墳（崇神陵）と渋谷向山古墳（景行陵）である。

行燈山古墳の周濠は3本の渡土堤で区切られる。後円部背後部分の外堤では地山に葺石が葺かれる。これを覆う有機質土から布留式の土師器壺が出土したことにより、原初の葺石ではないかと考えられた。このことから周濠には築造当初からある程度滞水していたことが有力視された。行燈山古墳周囲の比高差では渡土堤なしで墳丘裾を整備して水平にできないため、その規模はともかくと

して渡土堤が存在していたであろう。しかし、調査された渡土堤B・渡土堤Cではその存在が証明される確かなものは今のところ検出できていない〔書陵部1976・1977〕。

渋谷向山古墳の周濠は10本の渡土堤と10基の濠で形成される。その中でも渡土堤Eは地山を削り出して葺石も葺いていた。さらにその葺石を覆う地沼堆積土は泥炭状を呈する。これは築造時に濠底に水があったことの証明とされる。また、第5号濠と第6号濠を仕切る渡土堤Fはそれらの濠間の比高差が大きいこと、地山である花崗岩の岩盤がその上面と法面を削られながらも、旧堤体の一部として遺存することにより原初から存在したと判断される〔書陵部1975〕。

上記例では、調査された渡土堤が古墳築造当初からと確認された。しかし、その全てが原初のものであるとは限らない。渡土堤Cでは大きな段が形成されていたようだが、土堤状の施設であったかどうかは不明である。渡土堤Dは、濠底のヘドロと崩落した葺石を渫って盛り上げたように見える。かなり厚く盛っており、110cmまで掘り下げられたが地山・原初の遺構は見つかなかった。ここに本来の土堤がなかったか、旧形を失っているか、もっと下に遺存しているのかは分からぬ。つまり、その存在が不確かなものも混在しているのが実状といえよう〔書陵部1979・1995〕。

奈良市五社神古墳は奈良盆地の北部に位置する、佐紀盾列古墳群にあり、6本の渡土堤を持っている。渡土堤Aのみ調査が行われたが、土層より近代の護岸工事以後の堆積土と渡土堤の崩落土が堆積していた。また、1号濠と2号濠の調査でも築造当初の遺構はみられず、新たに造られたものと考えられている〔書陵部2005〕。

同じ佐紀盾列古墳群の西群では佐紀陵山古墳（日葉酢媛陵）や佐紀石塚山古墳（成務陵）や佐紀高塚古墳（称徳陵）が渡土堤をもつ。前二者は調査が行われるが、佐紀高塚古墳は未だその詳細はわからない。

さて、佐紀陵山古墳は北側に1本と前方部の両側に幅15mを越す、まるで造り出しのような渡土堤が存在する。東渡土堤では地山の勾配に対応しつつ、水平になるように仕上げられている様子がみられる。そして、地山を削り出し、その上に盛土される。西渡土堤では南北で2mの比高差があり、護岸用と思われる礫が葺いてあった〔書陵部1987〕。後円部側にも1本付いており、粘質土により堅固に版築されている。また、礫群と埴輪片が出でている。正確な築堤時期はわからないが、18世紀後

半頃に大規模な浚渫・掘削を行うが、それ以前の築堤とされる〔書陵部1992〕。

佐紀石塚山古墳は北側と南側に1本ずつ付く。北側渡土堤では、墳丘側で築造当初の葺石がみられた。また、渡土堤の基部に相当する部分で楕円筒埴輪が3本出土した。また、テラス面に原位置を保った埴輪群が一部遺存し、円筒・家・蓋・盾等の埴輪片が出土した。南渡土堤は表土と地山の間に3層の盛土が確認された。上2層は渡土堤でしかみられない砂質土系の土質で、下1層は比較的に多くの小礫を含む黄褐色土であった。この黄褐色土は墳丘本体との関係を示す西壁でも認められるが、砂質土は渡土堤でしかみられない。すなわち、黄褐色土を盛り上げた後、南渡土堤の築堤時に砂質土が盛土されたと考えられている〔書陵部1996〕。

これまでの例は前期のものである。中期になると主要な大型墳の造営自体が河内平野へと変る。しかし、台地上の平地形に移っても渡土堤が付くものもある。

大阪府藤井寺市の越中塚古墳がそうである。現在その墳丘はないが、発掘調査によりその墳丘と周濠が確認された。その際に前方部と周濠を繋ぐような形で渡土堤が検出された。そして、渡土堤斜面に葺石が葺かれることが確認されている。渡土堤の下方では自然堆積層である青灰色粘質土が堆積しており、渡土堤構築以前に周濠が滯水状態にあったことがわかっている。また、注目すべき点として、1点だけではあるが家形埴輪の破片が渡土堤上面より出土する〔藤井寺市2003〕。

また、方墳でも渡土堤がある場合もある。大阪府羽曳野市の向墓山古墳や藤井寺市淨元寺山古墳がそうである。両古墳とも墓山古墳の陪冢、ひいては誉田御廟山古墳(応神陵)の陪冢と考えられている。

向墓山古墳は墓山古墳の東側、後円部側にある一辺約68mの方墳である。そこで2本の渡土堤が確認されている。1本は墓山古墳の外堤へと向かって渡土堤が伸びている。しかし後世の削平により墳丘との接続部分はわかつていない。だが、そのまま向墓山古墳の平坦面へ続いていたと推測されている。もう1本は墳丘北側に付く。どこへ向かうのかは明らかでないが、約80°の角度で墳丘に取り付く。また墳丘斜面の葺石がそのまま渡土堤にも葺かれる。この2本の渡土堤はどちらも、地山を堀り残して造られる。また、落ち込む段差部分に取り付くので、計画的に設けられていたことが分かる〔羽曳野市1990〕。

淨元寺山古墳は墓山古墳の西側、前方部側にある一辆

67mの方墳である。墳丘の西側に幅約6.5mの渡土堤らしき高まりが発掘調査の測量図から見てとれる。

同じ墓山古墳の陪冢2基で渡土堤が見られる興味深い例である〔藤井寺市1997〕。

こうしたなか後期になると古市古墳群の大坂府羽曳野市の白髪山古墳(清寧陵)を上げることができる。

この古墳は前方部に2本の渡土堤をもつ。北渡土堤は本来の周濠の堆積土と思われる堆積層の上に粘土塊が厚くつき固めて構成されている。南渡土堤は盛土が2層になっており、時期はわからないが2回に渡って築堤されたと考えられる。また南渡土堤近くで、風化礫層が他のトレンチより浅い部位で見つかり、しかも西へ2m、東へ12.5mの範囲に広がっていた。これは渡土堤がかつてあったのではないかと推測される〔書陵部1981〕。

この他、近畿地方以外では数は減少するが渡土堤をもつ古墳は存在する。

岐阜県大垣市にある長塚古墳はその一例である。長塚古墳は後円部背面とくびれ部に渡土堤を持つ古墳である。墳丘自体も削平され、現在では前方部と後円部の一部しか残っていない。しかし、発掘調査によって渡土堤の存在が確認された。2本とも渡土堤の斜面に葺石が施されていた。また後円部側の渡土堤は盛土ではなく、地山を削り出して造られており、はじめから計画されていたことが分かっている〔大垣市1993〕。

他には山梨県東八代郡にある甲斐銚子塚古墳がある。後円部に半円形の平坦面が付いており、そこから渡土堤が伸びる。その本数も最多で3本が見積もられる。ただし、盛土ではなく地山を掘り残して造られ、内1本は周濠底面の変換点付近に設けられ、水位調節機能などが推測される〔山梨県2005〕。

## (2) 後補と思われる渡土堤

これらの古墳とは異なり、発掘調査によりその渡土堤が後世のものであると考えられる古墳もある。例として、高屋築山古墳(安閑陵)と鳥屋ミサンザイ古墳(宣化陵)、そして平田梅山古墳(欽明陵)がある。

大阪府羽曳野市にある高屋築山古墳は前方部と後円部に1本ずつ渡土堤が付く。しかし西渡土堤は、築造当初の盛土が滑落した後に築かれたものと考えられている。礫も出土しているが、崩落したもので原位置のものではないとされる。東渡土堤では地山上面より出土した瓦器の羽釜破片よりそれ以後の築堤とされる〔書陵部1994〕。

奈良県橿原市にある鳥屋ミサンザイ古墳は、2本の渡



図18 渡土堤取り付け位置模式図

土堤状の高まりが前方部にある。しかし測量図を見る限り高低差を伴わないので、ダムとしての機能を果たさないように見える。また、1988年の調査で2つとも築造当

初から存在したと確認できるものは出てこなかった〔書陵部1990〕。

同じく奈良県明日香村にある平田梅山古墳は、後円部

表2 古墳の高低差

古墳名	年代	規模	高	低	高低差	分類	数値	比率(規模:高低差)	分類
<b>奈良</b>									
箸墓古墳(倭迹迹日百襲姫命陵)	3C後半	280m	77.09	71.05	6.04	b	77	100:8	B
行燈山古墳(崇神天皇陵)	4C前半	360m	110.49	90.07	20.42	d	100	100:20	D
渋谷向山古墳(景行天皇陵)	4C前半	300m	107.72	87.55	20.17	d	83	100:25	D
五社神古墳(神功皇后陵)	4C中葉	300m	98.6	81.16	17.44	c	83	100:21	D
佐紀陵山古墳(日葉酸媛命陵)	4C中葉	255m	89.77	83.17	6.6	b	71	100:9	B
佐紀石塚山古墳(成務天皇陵)	4C中葉	245m	84	74.63	9.37	b	68	100:14	C
佐紀高塚古墳(称徳天皇陵)	4C中葉~後葉?	140m	88.31	80.74	7.57	b	39	100:19	C
室大墓古墳(室宮山古墳)	5C前葉	300m	118	114	4	a	83	100:5	A
念佛寺山古墳(開化天皇陵)	5C中葉	120m	75.89	72.16	3.73	a	33	100:11	C
西山塚古墳	6C前葉	170m	109.4	102	7.4	b	47	100:16	C
鳥屋見三才古墳(宣化天皇陵)	6C前葉	138m	80.54	77.7	2.84	a	38	100:7	B
平田梅山古墳(欽明天皇陵)	6C後葉	190m	97.13	89.15	7.98	b	53	100:15	C
<b>大阪</b>									
牧野車塚古墳	4C中葉	125m	27	21.5	5.5	b	35	100:16	C
摩湯山古墳	4C中葉	200m	—※1	—	6.5	b	56	100:17	C
久米田貝吹山古墳	4C後半	168m	37.4	35	2.4	a※2	47	100:5	A
高屋築山古墳(安閑天皇陵)	6C前半	180m	38.11	35.19	2.92	a	50	100:6	B
白髪山古墳(清寧天皇陵)	6C中葉	195m	42.84	37.96	4.88	a	54	100:9	B
<b>他 近畿地方</b>									
五色塚古墳	4C中葉	208m	22	15	7	b	58	100:12	C
雲部車塚古墳(雲部陵墓参考地)	5C中葉	250m	231.6	228.99	2.61	a	68	100:4	A
<b>近畿外</b>									
甲斐銚子塚古墳	4C中葉~後葉	169m	—※3	—	2.25	a	47	100:5	A

※1 〔岸本2005〕より筆者による概算で出した数値。 ※2 〔岸和田市1999〕より筆者による概算で出した数値。 ※3 近藤義郎 編『前方後円墳集成』中部編より筆者が概算で出した数値。  
a: 1~5m未満 b: 5~10m未満 c: 10m以上 d: 20m以上 A: 1~5 B: 6~10 C: 11~20 D: 20以上

と前方部に1本ずつ東西に墳丘を挟んで直線になるよう付く。ただし、その堆積状況が墳丘の盛土とは違うために墳丘築造後の盛土、それも江戸時代末期から明治時代初期と考えられている〔書陵部2000〕。

また、奈良市にある念佛寺山古墳(開化陵)も後補と思われる。渡土堤の盛土に近世の遺物を含んでおり、文久の改修時のものと見られている〔書陵部1978〕。

### (3) 周溝内の渡土堤の諸例

ここまで紹介してきた古墳は一部をのぞき、すべて周濠を持つ前方後円墳であった。しかし、周溝であっても渡土堤が付くものもある。奈良県桜井市にある箸墓古墳(倭迹迹日百襲姫命陵)が上げられる。箸墓古墳は周濠(溝)を持たないと従来考えられてきたが、近年発掘調査により周濠がある可能性が出てきた〔檍考研1994〕。その後の調査で外堤と渡土堤が検出された。渡土堤は東西方向に約8mにわたっており、葺石が葺かれていた。また、渡土堤下層で地山整形を確認しており、計画的に構築されたと考えられた〔桜井市1998〕。

そして、昨年、本学と関西大学、京都府立大学が大阪府枚方市にある牧野車塚古墳(図2)の測量で得た所見から、渡土堤には次のような特徴があった。

①後円部側と前方部側で高低差を持つこと。

②渡土堤の中心と中心から外れた部分では地形に違いが出ること。

③渡土堤が墳丘からゆるやかに下ったのち、外堤側にまた登っていくこと。

④渡土堤がある位置は外堤側からも墳丘へと伸びるような地形になっていること。

このように箸墓古墳や牧野車塚古墳に見られる周溝であっても、渡土堤が付くのは外縁の地形に高低差が生じる場合、傾斜を緩和させ基底線を明確にするため、階段状にしたためだと思われる。

### (4) 古墳の高低差との関係

周濠については前章のように分類があったが、渡土堤のみに着目して分類されることはなかった。そこで本論ではその分類試案も呈示したい。

渡土堤が付く条件として、まずその周濠外縁の高低差が上げられる。そこで、その一番高い位置と低い位置の標高より、その差を求めた(表2)。

そして、得た数値を以下の通りに分類した。

a: 1~5m未満 b: 5~10m未満 c: 10m以上 d: 20m以上と分類した結果、aが9基、bが8基、cが1基、dが2基という結果になった。

ここでaに分けた古墳は、平地に造営されているもの

や周溝をもつたもの、またはその渡土堤が後世のものではないかと疑われるものが主である。

bに分類できたのは佐紀陵山古墳（日葉酢媛陵）、佐紀石塚山古墳（成務陵）、佐紀高塚（称徳陵）古墳の佐紀盾列古墳群が主である。この3基は同様な立地で密接して造営されているため、同程度の高低差をもつ。よって、そろって同じb分類になったのだろう。

また、大阪府岸和田市摩湯山古墳は今でこそ周辺が住宅街になっているが、旧地形ではその後円部は丘陵と完全に切りはなされてはおらず、現在もその後円部背面まで周濠がまわっていない〔岸本2005〕。

cに分類できたのは、五社神古墳（神功皇后）のみであった。これは他の佐紀古墳群の中でも、より起伏のある丘陵の高い位置に立地する。

dに分類できたのは行燈山古墳（崇神陵）と、渋谷向山古墳（景行陵）であった。これはcに分類した五社神古墳よりもさらに急傾斜の丘陵地に営まれている。よって、この2基以外でこのd分類に入るものはない。

d類のように、高低差が激しい場所に築くことは渡土堤の数も増えることになる。すなわちc類の五社神古墳は6本となり、d類の渋谷向山古墳の10本となる。そして、調査が実施されていないが、7本ある佐紀高塚古墳はその必要性を示すのではないかと思われる。数少ない行燈山古墳の場合、渡土堤Cのように1本の渡土堤で10m近くの高さをもっており、この高低差は他の古墳では類を見ない（2）。現状ではこの高さのある渡土堤によって、高低差が20m以上あるにも関わらず本数が少なく済んでいることになるのは部分改変の証左を追及する必要がある。

にもかかわらず、これらを築造順に並べた場合、奈良県においてはd類である行燈山古墳と渋谷向山古墳、c類である五社神古墳そして、b類である佐紀盾列古墳群へと移り変わっていくことがわかる。そして、古墳時代中・後期になるとa類・b類に占められる。古墳の造営地が丘陵から平野へと移り変わって行く様子が渡土堤の高低差によって読み取れる（3）。

このように実数値の高低差で分類を行なったが、墳丘規模の違いがあるために大型のものほど絶対的な比高差が大きくなり同率には比べ難い。そのため、比率についても比較することにした。そこで、墳丘規模が最長である行燈山古墳を基準として、他の古墳の数値を出し、その数値をもとに高低差の比率を出してみた（表2）。

高低差の数値を以下の通りに分類した。A：1～5、

表3 渡土堤の幅と長さ

古墳名	年代	位置	渡土堤の幅	渡土堤の長さ
<奈良>				
箸墓古墳(倭迹迹日百襲姫命陵)	3 C 後半		2m	約8m※1
行燈山古墳(崇神天皇陵)	4 C 前半	A	4.21m	84.2m
		B	4.21m	58.94m
		C	4.21m	21.05m
渋谷向山古墳(景行天皇陵)	4 C 前半	A	2.9m	19.35m
		B	5.8m	9.67m
		C	1.93m	17.41m
		D	3.87m	10.64m
		E	3.87m	21.28m
		F	3.87m	15.48m
		G	2.9m	11.61m
		H	3.87m	7.74m
		I	4.83m	11.61m
		J	2.9m	11.61m
五社神古墳(神功皇后陵)	4 C 中葉	A	4.44m	19.99m
		B	4.44m	15.55m
		C	3.33m	19.99m
		D	3.33m	14.44m
		E	4.44m	13.33m
		F	5.55m	17.77m
赤土山古墳(赤土山1号墳)	4 C 中葉		3.42m	7.69m
佐紀陵山古墳(日葉酢媛命陵)	4 C 中葉	北	2.92m	7.31m
		東	16.09m	33.64m/21.94m
		西	18.28m/8.77m	27.79m
佐紀石塚山古墳(成務天皇陵)	4 C 中葉	北	19.50m	4.5m
		南	22.5m	3.3m
佐紀高塚古墳(称徳天皇陵)	4 C 後半	A	7.06m	3.53m
		B	1.76m	5.29m
		C	2.64m	5.29m
		D	2.64m	6.17m
		E	4.41m	6.17m
		F	2.64m	5.29m
		G	1.76m	8.82m
室大墓古墳(室宮山古墳)	5 C 前葉		10m	59.24m※2
念仏寺山古墳(開化天皇陵)	5 C 中葉	北	3.07m	6.15m
		東	2.3m	3.07m
		西	4.61m	4.61m
西山塚古墳	6 C 前葉	A	3m	10m
		B	2.5m	10m
		C	1.5m	19.5m
鳥屋見三才古墳(宣化天皇陵)	6 C 前葉	A	2.53m	28.73m※3
		B	3.38m	37.18m※3
平田梅山古墳(欽明天皇陵・石山古墳)	6 C 後葉	西	4.54m	21.81m
		東	4.54m	18.18m
大阪				
牧野車塚古墳	4 C 中葉	A	3.9m	4.9m
		B	3.25m	4m
		C	2.2m	4.5m
		D	1.6m	3.8m
摩湯山古墳	4 C 中葉	A	5m	39m
		B	2m	23m
		C	15m	32m
久米田貝吹山古墳	4 C 後半	A	3.75m	32.5m
		B	2.5m	11.25m
		C	5m	15.62m
		D	2.5m	20m
向墓山古墳	5 C 前葉	西	3.6m	9.5m
		北	6.7	推定4.5m
淨元寺山古墳(応神陵陪塚)	5 C 中葉		6.25m	7m
越中塚古墳	5 C 中葉		5m	4.1m
高屋築山古墳(安閑天皇陵)	6 C 前半	東	2.57m	11.99m
		西	3.42m	11.14m
白髮山古墳(清寧天皇陵)	6 C 中葉	A	2m	16.54m
		B	1.5m	24.82m
その他近畿地域				
橋井大塚山古墳	4 C 前期		6.9m	13.84m
五色塚古墳	4 C 中期		2.5m	4.3m
雲部車塚古墳(雲部陵墓参考地)	5 C 中葉	東	2.5m	27.5m
		西	5m	30m
		南※4	—	40m
近畿外				
甲斐銚子塚古墳	4 C 中葉～後葉		約1.2m	—
矢道長塚古墳	4 C 末葉	A	4m	—
		B	5.6m	—

※1 全貌が出ていない。※2 すべて残っていないため推定。※3 一部、もしくは墳丘と離れている。※4 現在水没。

B : 6~10、C : 11~20、D : 20以上。

これらを分類した結果、Aが4基、Bが5基、Cが8基、Dが3基という結果になった。

ここでAに分けられた古墳は、全てがa類に分類した古墳であった。

Bに分類できたのはb類に分類した佐紀陵山古墳、箸墓古墳（倭迹日百襲姫命陵）の前期古墳。そして、a類であった鳥屋ミサンザイ古墳、高屋築山古墳、白髮山古墳の後期古墳が加わる。

Cに分類できたのは、b類であった佐紀石塚山古墳、佐紀高塚古墳、摩湯山古墳、牧野車塚古墳、五色塚古墳など前期でも新しいものが多く、2分される。そして、a類であった念佛寺山古墳を入れて、合計7基と最多の分類数になった。

Dに分類できたのはd類であった行燈山古墳と渋谷向山古墳。そして、c類だった五社神古墳と同じ丘陵地にあっても比較的高い位置に立地する古墳がそろい、前期でも古いものとなった。

高低差を比率で表すことで、絶対高での分類ではあまり高低差がないように思われた古墳もその比率差があることがわかった。例えば、台地に築造された牧野車塚古墳。5.5mの高低差を持っていたが、全体的に見るとあまりその数値は高いようには見えなかった。しかし比率で示すことで、丘陵地に築造された佐紀石塚山古墳や摩湯山古墳と似たような数値となった。これはいかに、墳丘サイズと高低差のある立地地形の選択との関わりが深かったことの証左となった。

## (5) 幅と長さの比較

古墳自体の高低差の他に渡土堤の幅を計り、それについても検討する（表3・4）。

それによれば、2~4m台に集中している。渡土堤を有している古墳の数でも本数の上でも大阪府よりも奈良県の方が優る。そのため正確な数とはならないかもしれないが、大阪府では4mを下まわるものが多い点、そして全体に5mを越すものが少ない点が特徴と言える。

それに対し奈良県では、先述のように2~4m台が多いが、5~10m未満のものも4本ある。また、佐紀陵山古墳や佐紀石塚山古墳のような特例があるため、10~20mを越すものもある。これらより、大阪府に比べて奈良の方が幅が広いものが多いことが読み取れる。

また、行燈山古墳のようにすべて同じ幅のものもあるが、奈良県では渋谷向山古墳や五社神古墳、大阪府では

表4 渡土堤の幅集計表

	奈良	大阪	その他	合計
1m台	4	2	1	7
2m台	11	5	2	18
3m台	10	5		15
4m台	11		1	12
5m台	2	2	2	6
6m台			3	3
7m台	1			1
8m台	1			1
10~20m未満	4			4
20m以上	1			1
合計	45	14	9	68

久米田貝吹山古墳など本数が多い古墳でバラつきが見られる。渋谷向山古墳では最短1.93m、最長で5.8mとなっている。五社神古墳では3.33~5.55m、久米田貝吹山古墳は2.5~5mと、数の多い3~5m台の中には入るが1つのサイズにそろうということはない。

しかし、五社神古墳では渡土堤Aと渡土堤F以外は左右対称に並んでいる。対応する渡土堤は同じ幅であった。

ここで、興味深い事例がある。牧野車塚古墳である。前章で述べたように周溝であるが、4つの渡土堤を有する。牧野車塚古墳の渡土堤幅は1.6~3.9mとやはりバラつきがみられる。しかし、渡土堤は高い方からA~Dのアルファベットを振っているが、Aは3.9m、Bは3.25m、Cは2.2m、Dは1.6mと高いほど渡土堤幅が広く、低くなると渡土堤幅が狭まることが窺えた。

一方、長さについては幅との関連性ではなく、牧野車塚古墳の場合それらの幅はそれがもつ機能との関わり合いが強いようである。

## (6) 取り付き位置の配置パターン

さらに渡土堤の取り付き位置を見るために、図18のような模式図を作成した。それを重ねたところ、前方部を正面から見て、前方部前面、前方部左側、後円部右側に多く付いていることがうかがえる（図19参照）。

この状態では取り付きの全体の傾向がつかめないため、前方後円墳を区画分けして出現頻度を表わした（図20参照）。後円部両サイドに設定した後円部1・後円部2、後円部背面に設定した後円部3、そして、くびれ部に設定したくびれ部1・くびれ部2、前方部両サイドに設定した前方部1・前方部2、前方部前面に設定した前方部3、以上8区画に分けた。その結果、各古墳は表5のようになった（表5・図21参照）。

表では、墳丘主軸に沿った後円部3と前方部3は15%と18%と同程度の数値となった。佐紀石塚山古墳や平田

梅山古墳（欽明陵）のように両方付くものは4基ほどしかないが（4）、久米田貝吹山古墳や五色塚古墳のように片方のみ付くものは多い。

全体の数値を見てみると後円部1・2の合計が31%、前方部1・2の合計が26%と後円部側の方が多い。

しかし後円部両側の1・2は9%と22%と著しい差が開いた。明確な理由はつかめないが、傾向としては古墳時代前期の古墳に多く、後円部を左にした側面観を重視しているのか、陸橋として墳丘へのアプローチに多用される方向があったのであろうか。前期以降のものとなると、高屋築山古墳、福岡市拝塚古墳の2基だけとなる。これは後円部1でも同様の傾向が見られ、拝塚古墳のみが有する。

一方、前方部1・2は12%と14%とほぼ同じ割合となり、後円部のように時期別での特色は見られなかった。しかし、幅の時に少し触れたが、五社神古墳のように、すべてではないにしろ左右で似たような位置に渡土堤が付く場合がある（5）。まったくの左右対称となると、白髪山古墳が上げられる。位置では多少ずれがあるが、渋谷向山古墳は左右の本数が1本違うのみで、後円部側がほぼ対称の位置にある。また、後補と考えられているが、平田梅山古墳（欽明陵）のように同程度の幅で後円部3と前方部3両側に付くタイプも対称的であると考えられる。こうした傾向は、左右対称にするなんらかの働きがあったのではないかと思われる。また、後円部1～3区画での合計本数と前方部1～3区画の合計本数が、35本と32本となり、とても興味深い数値となる。

くびれ部の数値は両サイドとも同じ値になった。くびれ部に付く古墳は奈良県では、行燈山・渋谷向山・五社神・西山塚古墳。大阪府では牧野車塚・摩湯山・久米田貝吹山古墳の計7基である（6）。これらで共通するのは、西山塚古墳を除いた6基の古墳は全て前期の築造で、比較的大きい高低差を作るということである。特に行燈山古墳と渋谷向山古墳は20mを超える高低差をもち、五社

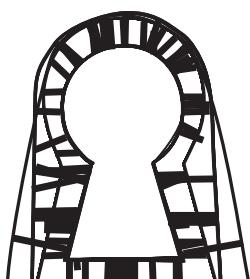


図19 模式図照合図

神古墳も約17mの高低差をもつ。大阪府の3基では牧野車塚古墳は5.5m、摩湯山古墳は6.5mと、5m以上の高低差をもっている。久米田貝吹山古墳のみ2.4mと5m以上の差はない。

しかし、このことが古墳の多くが渡土堤をくびれ部に設置することによって、その大きな高低差を解消しようとしていたことをうかがい知ることができるのである。

以上を一旦まとめると、後円部側の渡土堤が古墳時代前期に集中している点と前方部側ではそのような時期変化が見られない点より、前期の古墳が丘陵地で造られたためにその高低差が激しいと考えられる。これは西殿塚古墳（手白香皇女陵）や西山塚古墳のように丘陵に対して直交して造られるより、丘陵に沿って造られることが多い。そのため後円部が中心となって一番高くなるので、その基底線を解消するためだと思われる。のために後円部側に渡土堤を多く付けることになるが、築造に際して丘陵部分をぎりぎりまで多く利用した後円部であったことになる。小林行雄氏の自然の山丘に続くというイメージはこのことであろう。また、後円部側に付いていない古墳は平野や台地での立地なので（7）、高低差を解消させるために必ずしも後円部である必要性がなかったのではないだろうか。

## 5. 周濠と渡土堤の形態と機能についての一試考

### （1）高低差の分類と渡土堤の機能

これまで周濠と渡土堤の分類を行なってきた。

まず周辺地形の高低差との関係である。絶対高による分類と、比率による分類では該当する古墳が少々異なつ

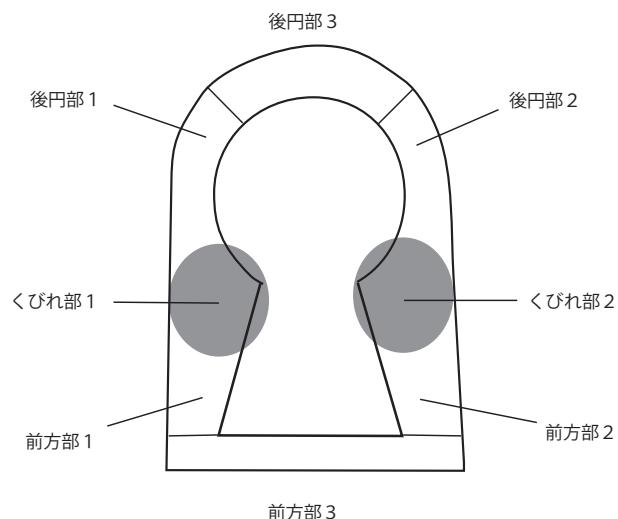


図20 区画分け図

表5 渡土堤の取り付き位置集計表

古墳名	後円部1	後円部2	後円部3	くびれ部1	くびれ部2	前方部1	前方部2	前方部3	合計
<奈良>									
箸墓古墳（倭迹迹日百襲姫命陵）		1							1
行燈山古墳（崇神天皇陵）	1	1		1					3
渋谷向山古墳（景行天皇陵）	2	2	1	1		1	2	1	10
五社神古墳（神功皇后陵）	1	1		1			2	1	6
赤土山古墳（赤土山1号墳）		1							1
佐紀陵山古墳（日葉酸媛命陵）			1			1	1		3
佐紀石塚山古墳（成務天皇陵）			1					1	2
佐紀高塚古墳（称徳天皇陵）		3	1			2	1		7
室大墓古墳（室宮山古墳）						1			1
念佛寺山古墳（開化天皇陵）			1					2	3
西山塚古墳			1		1	1			3
鳥屋見三才古墳（宣化天皇陵）							1	1	2
平田梅山古墳（欽明天皇陵）			1					1	2
<大阪>									
牧野車塚古墳		1			1		2		4
摩湯山古墳	1	1			1				3
久米田貝吹山古墳	1	1	1		1				4
越中塚古墳								1	1
高屋築山古墳（安閑天皇陵）		1						1	2
白髪山古墳（清寧天皇陵）						1	1		2
<その他近畿>									
椿井大塚山古墳		1	1						2
五色塚古墳								1	1
雲部車塚古墳（雲部陵墓参考地）			1	1				1	3
<近畿外>									
甲斐銚子塚古墳		1							1
矢道長塚古墳			1			1			2
押塚古墳（重留1号墳）	1	1				1		2	5
合 計	7	16	11	4	4	9	10	13	74

た。高低差の分類では奈良県において古墳の造営地が丘陵地から平野へ移って行った様子が分かった。大阪府では、このような傾向はつかめなかつたが、比率による分類では摩湯山古墳のように丘陵地より、高屋築山古墳（安閑陵）や白髪山古墳（清寧陵）のように台地に立地

する古墳へと移り変わることが分かる。

しかし、絶対高による分類では造営地と時期の関係がみられた奈良県では、比率による分類ではそこまで顕著に現れなかつた。しかし全体を通してみてみると、D類では行燈山古墳（崇神陵）や渋谷向山古墳（景行陵）や五社神古墳（神功皇后陵）などに高低差が大きい前期古墳が集中している。また、C類では佐紀石塚山古墳（成務陵）、佐紀高塚古墳（称徳陵）、摩湯山古墳、牧野車塚古墳、五色塚古墳などの比較的新しい前期古墳と西山塚古墳、平田梅山古墳（欽明陵）の後期古墳で分けられる。B類も同様に、箸墓古墳（倭迹迹日百襲姫命陵）、佐紀陵山古墳（日葉酢媛陵）の前期古墳と鳥屋ミサンザイ古墳（宣化陵）、高屋築山古墳、白髪山古墳の後期古墳で分けられ、A類では久米田貝吹山古墳と甲斐銚子塚古墳の前期古墳と室大墓古墳と雲部車塚古墳の中期古墳に分けられた。

このように見てみると、前期古墳は全体的に散らばつてはいるが、高低差の比率が高いDやCには前期古墳の

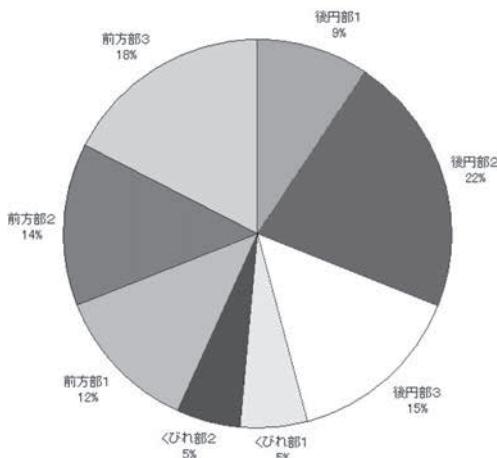


図21 渡土堤の取り付き位置グラフ

表6 取り付き位置集計表

		後円部	くびれ部	前方部	合計
奈良	前期	17	3	13	33
	中期	1	0	3	4
	後期	2	1	4	7
	計	20	4	20	44
大阪	前期	6	3	2	11
	中期	0	0	1	1
	後期	1	0	3	4
	計	7	3	6	16
他近畿	前期	2	0	1	3
	中期	1	1	1	3
	計	3	1	2	6
近畿外	前期	2	0	1	3
	中期	2	0	3	5
	計	4	0	4	8

中でも古い古墳が、比率が低い方が前期古墳でも比較的新しい傾向にある。同じ古墳時代前期で丘陵末端部を利用している古墳でも、徐々に比高差が少ない地へと移動しているのが読み取れる。中期は3例しかないので省くが、後期古墳はB類とC類に集中している。台地上でも高低差が付くことは牧野車塚古墳ですでにわかっているので、丘陵地に比べ比較的安定した平野や台地上に造営されたために、B類とC類に集中したのではないだろうか。

また、本数も関係してくる。D類である渋谷向山古墳と五社神古墳、そしてC類の佐紀石塚山古墳はいずれも5本以上の渡土堤をもつ。比率による分類でC類に分けられた古墳も比較的本数が多い傾向にある。例えば、牧野車塚古墳の4本や、摩湯山古墳と西山塚古墳の3本などである。それに比べ例外はあるものの、B類の鳥屋ミサンザイ古墳と高屋築山古墳そして白髪山古墳はそれぞれ2本で、箸墓古墳は1本となる。A類では久米田貝吹山古墳と摩湯山古墳が例外となるが、室大墓古墳や銚子塚古墳（8）が1本である。時期別でみると前期では1～10本とバリエーションがあるが、中期・後期となると1～3本の間のみになる。特に2本と3本が多く見られ、8基の古墳中2本は4基、3本は3基となった。

これは、丘陵地より平野や台地へ移ったことによって高低差が少なくなり、その分本数が必要なくなったことのあらわれであろう。それに比べて、丘陵地に造営していた前期では渋谷向山古墳や五社神古墳のような高低差が大きい立地では本数が多く、同じ丘陵地でも高低差が少ない佐紀陵山古墳や佐紀石塚山古墳などでは本数が少なくなることが読み取れた。

## (2) 前期古墳と渡土堤の関係

模式図を用いての取り付き位置のパターン分けは前章で行なった。それにより、①後円部3と前方部3はほぼ同程度の数値となったが、両方付くのは4基のみで他はどちらか片方である点。②後円部に付く渡土堤はほとんどが前期古墳である点。③前方部1・2もほぼ同程度の数値となり、左右対称とする動きがあったと思われる点。④後円部と前方部の合計本数が34本と32本と同程度になった点。⑤くびれ部は両サイドでまったく同じ数値となった。また、くびれ部に付いている古墳は前期古墳が多く、高低差が大きい点。以上5つの事項が観察できた。

これらを前節での観察と合わせて考察してみる。

まず、どちらも、特徴が前期古墳に偏ることが上げられる。渡土堤が付いた古墳の多数が前期であるで当たり前ではあるが、それにしては中・後期においての特徴が希薄と言えるだろう。また、後補である渡土堤と思われている古墳のほとんどが後期古墳ということもある。ただし、高低差での分類では確かに高低差は持つため、一概には言えないがその存在には疑問が残る。

次に、前期古墳の渡土堤の特徴を簡単にまとめてみる。まず高低差の分類においても、比率の分類においても高低差が大きい割合が多く一部例外はあるものの主に、b～d類とB～D類の古墳が占めている。高低差の絶対高による分類ではb類が、比率による分類ではC類が多い傾向にある。丘陵地利用のために高低差が付き、それを緩和するため数多くの渡土堤が設けられ、特に一番高くなる後円部に渡土堤が付くパターンが多い。また、渡土堤がくびれ部に付くのも前期古墳が大半を占めている。これも高低差が大きいためであると分析した。

渡土堤が付く前期古墳に共通するのは、大きい高低差をもつ立地でいかに工夫してそれを解消するかにある。それに対し、中・後期古墳は立地の上から丘陵と台地とで異なる。しかし、前述したように台地上でも高低差を伴うため、それを解消するために付けられているために前期ほどの統一性がなかったと考える。

また、4点目で合計本数について触れたが、詳しく見ると地域ごとで同様の結果となった（表6参照）。奈良県では20本ずつ。大阪では7本と6本。他の近畿地方では3本と2本、近畿地方外では4本ずつとなった。しかし、時期ごとに見てみると決して同じ割合ではないことも読み取れた。つまりは、左右対称という意識があったにしろ、前方部側と後円部側で本数を揃えようという考えはなかったと思われる。

### (3) 周濠掘削時の排水と築堤構築の関連性

ここまで渡土堤の機能として、周濠に水を溜めるため、高低差を解消するため、石材や埋葬品等を運ぶ通路などの用途があったという仮定のもとで論を進めてきた。しかしながら、これには問題が1つ生じる。それは築造中の排水である。雨水や湧き水を流さなければ周濠（溝）内に溜まり、掘削できないため排水溝を設けるが、その際に渡土堤がついていてはそこで水が溜まってしまうため、築造に支障が出る。しかし、箸墓古墳や佐紀陵山古墳、向墓山古墳など（9）地山を掘り残したり、削り出して形成している。これらで最も高いところにある渡土堤での排水の必要はない。最も低いところも同様である。問題となるのはその中間にある渡土堤である。それに取り付く排水溝には2009年に調査された兵庫県朝来市池田古墳で検出される例があるが報告書を期待したい。その他に推測される2点の可能性をここでは提示しておく。

まず1つ目は渡土堤上の溝の存在である。これは箸墓古墳や越中塚古墳（向墓山）で見られるものである。箸墓古墳の渡土堤は地山成形を行なって造られている。その上面には土堤に直交して幅約1.6m、深さ25cmの溝が掘られていた。溝の内部には腐植層が入っており、東の号から西の濠へとオーバーフローした水を処理するための溝であると考えられている〔桜井市1998〕。また、越中塚古墳の渡土堤では中央部が凹状に窪んでおり、その下方には自然堆積層である青灰色粘質土が堆積しており、築堤以前に滞水状態にあったことがわかっている〔藤井寺市2003〕。

2つ目は渡土堤の築造過程にある。例えば、佐紀陵山古墳の東渡土堤は地山を削り出し、さらに地山の勾配に対応して盛土される〔書陵部1985〕。佐紀石塚山古墳の南渡土堤では表土と地山の間に3層の盛土が確認されている。上2層は墳丘本体とは関わりがない砂質土系の土質であったが、下1層は墳丘本体でも見られる小礫を含む黄褐色土であった〔書陵部1995〕。

また、時期などは定かではないが白髮山古墳（清寧陵）の南渡土堤でも2層の盛土が確認されている〔書陵部1981〕。

こうした例からすれば、はじめは地山であっても盛土であっても、現状ほど高いものでなかったということである。それならば、たとえ堤で水が堰き止められても、その量は少なかったはずである。

牧野車塚古墳の渡土堤A（図3）は墳丘側からゆるやかに下った後、高さ約45cmの渡土堤が形成される。また、

淨元寺山古墳の渡土堤と思われる高まりはこの渡土堤Aに似た形状となっている〔藤井寺市1997〕。牧野車塚古墳の渡土堤は周辺に堆積層があまりなかったため、この図はほぼ築造当初と変わらない。そして、台地に立地するものの、高低差とその比率は佐紀陵山古墳と佐紀石塚山古墳と同等である。とするならば、当初は両古墳とも牧野車塚古墳の渡土堤Aや淨元寺山古墳のような中央が低くなった形態だったのではないだろうか。牧野車塚古墳は掘削時に渡土堤を形成した後で手を加えられなかったようだが、箸墓古墳や佐紀陵山古墳は地山整形後に盛土して渡土堤を形成していることが確認されるものもある。削り出した時は雨水・湧き水対策としてさほど高さをともなわなくとも、後世に灌漑用に盛土して高い渡土堤を形成していた可能性が高いと言える（10）。

## 6. おわりに

本論では、これまで単体で研究されることがなかった周濠と渡土堤についての型式やその機能についての考察を試みた。

周濠においては、その形態より鍵穴形と盾形に分類し、さらに細分化していく。これにより、鍵穴形I型式、鍵穴形II型式、盾形I型式、盾形II型式、盾形III型式、盾形I'型式の2類6型式となった。

前期は主に丘陵地に築造されるため、鍵穴形I型式と盾形I型式が多い。前期の古墳群である佐紀盾列古墳群の中でも、1基だけ立地が丘陵より離れている宝来山古墳のみ鍵穴形II型式となり、渡土堤が付かない。古墳時代中期になると最も普遍的である盾形II型式へと変ってゆく。そして、中期から後期にかけて前方部の幅が広がって行く傾向とともに、周濠の前方部側の幅も広がり盾形III型式となる。この盾形III形式と同時期に築造された渡土堤が付く古墳の中には盾形I'型式となるものも存在する。しかし、その数はあまり多くはない。

こうした周濠に伴う渡土堤に関しては、今までまったくと言ってよい程、体系立った研究は行なわれていなかった。そこで3つの視点で渡土堤の分類、およびその機能について観察した。

1つ目は高低差である。渡土堤が付く条件として周濠周囲の高低差があるので、その高低差で分類した。また、その高低差だけでは墳丘規模の違いで大型のものほど比高差が大きくなり同率の分類ではなくなるので、比率による分類も行なった。

2つ目は幅と長さの比較である。それにより、幅は2

～4m台が多い傾向にあった。また、奈良県は佐紀陵山古墳（日葉酢媛陵）や佐紀石塚山古墳（成務陵）などがあるため、5mを越すものも見られた。しかし、幅と長さの関連性は残念ながら見られなかった。

3つ目は取り付き位置のパターン分けである。計8つの区画にわけ、その出現頻度を見た。

その結果、渡土堤が付いている古墳の多くが前期古墳であり、そのため前期古墳に付く渡土堤の特徴が見えてきた。すなわち、鍵穴形I・盾形I型式の周濠ということになるが、丘陵性の立地ゆえ、その高低差をどうやって解消させるか、ということが築造上の課題となった。それを解消させるために、後円部側やくびれ部に渡土堤が付くことが多いと推察した。また、渋谷向山古墳（景行陵）や五社神古墳（神功皇后陵）のように本数が多いのもその高低差を解消するための計画性があった。この渡土堤を設けることで墳丘裾は小林行雄氏のいう無頓着なものではなく、渡土堤を経由して各部分ごとで整えられていたことになる。

中・後期の古墳の渡土堤は統一性はあまり見られず、後期古墳の渡土堤は後補と考えられるものも多い。そこでその設置の計画性については疑問をかけておく。

また、渡土堤の用途について、今回集めた資料では解明するには至らなかった。今後の良好な発掘調査資料の増加を期待したい。

## 注

- (1) 渡土堤に振られたアルファベットまたは名称は、報告書等で振られている場合はそちらを引用した。振られていない場合は前方部前面より、時計回りに筆者が振った。
- (2) 渋谷向山古墳では最大5m、五社神古墳では最大3mとなる。ただし、この数字は行燈山古墳のように渡土堤に等高線が入っていないため、渡土堤周辺の等高線を読んだものである。
- (3) 箸墓古墳は時期は早いが、比較的に平坦な扇状地に造成されているため省いた。
- (4) 他には念佛寺山古墳（開化陵）や雲部車塚古墳（陵墓参考地）がある。
- (5) 他には行燈山古墳、佐紀陵山古墳が上げられる。
- (6) 雲部車塚古墳もくびれ部に渡土堤が付いているが、現在水没しているため除いた。
- (7) 西山塚古墳は丘陵に直行する位置にあるため、例外となる。
- (8) 全貌がわかつておらず最多で3本と見積もられているが、ここでは1本とする。
- (9) 他には岐阜県長塚古墳・山梨県甲斐銚子塚古墳などがある。
- (10) ただし、佐紀石塚山古墳のように最下層以外の盛土の

土が他では使用されていない土質のものを使っている場合、後の修陵時にかさ上げされた可能性も考えられる。

## <引用論文>

- 上田宏範 1950「前方後円墳築造の計画性」『古代学研究』第2号 古代学研究会  
上田宏範 1969『前方後円墳』学生社  
堅田直 1971「前方後円墳の立地と周濠構造」『歴史研究』第7・8号合併号 歴史研究編輯委員会  
小林行雄 1937「前方後円墳」『考古学』第8巻第1号 東京考古学会  
白石太一郎 1983「古墳の周濠」『角田文衛博士吉希記念古代学論叢』角田文衛博士吉希記念事業会  
末永雅雄 1975「立地環境」『古墳の航空大観』本文編 学生社  
都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会  
浜田耕作 1936「前方後円墳の諸問題」『考古学雑誌』第26巻第9号 日本考古学会  
森本六爾 1929「前方後円墳型の推移過程」『川柳村将軍塚の研究』

## <参考文献>

- 石野博信 他 編 1992『古墳時代の研究』7 古墳I 墳丘と内部構造 雄山閣  
宮内庁書陵部陵墓課 1980『陵墓関係論文集』 学生社  
宮内庁書陵部陵墓課 1988『陵墓関係論文集』続 学生社  
宮内庁書陵部陵墓課 1996『陵墓関係論文集』Ⅲ 学生社  
近藤義郎 編 1992『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社  
近藤義郎 編 1992『前方後円墳集成』中部編 山川出版社  
近藤義郎 編 1992『前方後円墳集成』九州編 山川出版社  
白石太一郎 1989『古墳の知識』1 考古学シリーズ19 東京美術  
末永雅雄 1975『古墳の航空大観』学生社  
鶴澤探真 画 2005『文久山陵図』新人物往来社

## <古墳・遺跡に関する参考資料>

- 大垣市教育委員会 1993『長塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第3集  
岸本直文 2005『岸和田市摩湯山古墳の測量調査』『前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動の研究』科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告 大阪市立大学  
岸和田市教育委員会 1999『久米田貝吹山古墳』第1～4次調査概報  
京都橘大学 2008『京都橘大学 文化財調査報告2007』  
宮内庁書陵部 1974『景行天皇陵前方部正面外堤護岸区域の調査』『昭和47年度 陵墓

宮内庁書陵部	関係調査概要』 第25号 1975「景行天皇陵渡土手樋管改修工事の調査」昭和48年度 陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第26号	宮内庁書陵部	查概要『書陵部紀要』第48号 2000「欽明天皇 檜隈坂合陵整備工事区域の調査」平成10年度陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第50号
宮内庁書陵部	1976「崇神天皇陵の外堤護岸地区の調査」昭和49年度 陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第27号	宮内庁書陵部	2005「神功皇后狭城盾列池上陵墳塋裾護岸その他整備工事区域の調査および墳丘外形調査」平成15年度陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第56号
宮内庁書陵部	1977「崇神天皇陵外堤及び墳丘護岸区域の事前調査」昭和50年度陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第28号	宮内庁書陵部	2006「雲部陵墓参考地墳塋裾護岸その他工事に伴う事前調査」平成16年度陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第57号
宮内庁書陵部	1978「開化天皇陵の外堤止水壁設置箇所及び渡堤樋管改修箇所の調査」昭和51年度 陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第29号	宮内庁書陵部	2007「雲部陵墓参考地墳塋裾護岸その他工事に伴う事前調査」平成17年度陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第58号
宮内庁書陵部	1979「景行天皇陵渡土堤改修区域の調査」昭和52年度陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第30号	神戸市教育委員会	2006『史跡五色塚古墳・小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』
宮内庁書陵部	1981「河内坂門原陵外堤護岸工事区域及び陵前排水井設置箇所の調査」昭和54年度 陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第32号	御所市教育委員会	1996『奈良県御所市 室宮山古墳範囲確認調査報告』
宮内庁書陵部	1987「狭木之寺間陵整備工事区域の調査」昭和60年度 陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第38号	桜井市教育委員会	1998「纏向遺跡第109次調査概要報告(箸墓古墳隣接地)」「平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』
宮内庁書陵部	1990「身狭桃花鳥坂上陵整備工事箇所の調査」昭和63年度 陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第41号	天理市教育委員会	2003『史跡赤土山古墳 第4次～第8次発掘調査概要報告書』
宮内庁書陵部	1992「狭木之寺間陵墳丘外形調査」平成2年度 陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第43号	羽曳野市教育委員会	1990「向墓山古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告 平成元年』
宮内庁書陵部	1994「安閑天皇古市高屋丘陵整備工事区域の調査」平成4年度 陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第45号	藤井寺市教育委員会	1997「淨元寺山古墳の調査」『西墓山古墳』
宮内庁書陵部	1995「景行天皇山辺道上陵整備工事予定区域の調査」平成5年度陵墓関係調査概要『書陵部紀要』第46号	藤井寺市教育委員会	2003「はざみ山遺跡・青山遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告』XVIII
宮内庁書陵部	1996「狭城盾列池後陵整備工事区域の事前調査」平成7年度陵墓関係調	奈良県橿原考古学研究所	1994「箸墓古墳(纏向遺跡第81次)」「奈良県遺跡調査概報(第2分冊)
		山城町教育委員会	1999『椿井大塚山古墳』
		山梨県埋蔵文化財センター	2005『国指定史跡銚子塚古墳附丸山古墳』

報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく ぶんかざいちょうさほうこく							
書名	京都橋大学 文化財調査報告 2008							
副書名	牧野車塚古墳・禁野車塚古墳・宮道古墳・大宅廃寺瓦窯跡							
卷次								
シリーズ名	京都橋大学 文化財調査報告							
シリーズ番号	2							
編著者名	一瀬和夫 堂ノ本智子 高橋裕子 松浦未春							
編集機関	京都橋大学 文学部文化財学科							
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL. 075-571-1111							
発行年月日	2009年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
牧野車塚古墳	大阪府枚方市小倉東	27210	141	34° 83' 38"	135° 66' 9"	2008年7月4日～ 2008年7月7日、 2008年8月4日～ 2008年8月10日	927m <sup>2</sup>	学術調査
禁野車塚古墳	大阪府枚方市宮之阪 5丁目	27210	152	34° 48' 38"	135° 39' 26"	2008年8月4日～ 2008年8月11日、 2008年9月8日、 2008年10月17日	950m <sup>2</sup>	学術調査
宮道古墳	京都府京都市山科区 勧修寺西栗栖野町	26100	632-3	34° 58' 13"	135° 48' 13"	2008年8月18日～ 2008年8月23日	2205m <sup>2</sup>	学術調査
大宅廃寺瓦窯跡	京都府京都市山科区 大宅向山	26100	637	34° 57' 55"	135° 49' 17"	2008年8月25日～ 2008年8月30日	1219m <sup>2</sup>	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
牧野車塚古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 渡土堤	—	(測量調査) 墳丘長 107.5m 後円部 径58m 前方部 幅45m
禁野車塚古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳	土師器片	(測量調査) 墳丘長 120m 後円部 径63m 前方部 幅55m
宮道古墳	古墳	古墳時代	円墳 周溝 (2.2~2.7m) 南向きに開く落込み	—	(測量調査) 墳丘長 35m 墳丘高 3.3m 中臣十三塚古墳群
大宅廃寺瓦窯跡	窯跡	奈良時代	瓦窯	—	(測量調査) 1,219m <sup>2</sup>

京都橘大学 文化財調査報告 2008  
牧野車塚古墳・禁野車塚古墳・宮道古墳・大宅廃寺瓦窯跡

---

発行 京都橘大学 文学部

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL 075-571-1111

発行日 2009年3月31日

印 刷 (有)真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺下ル TEL 075-351-6034



京都橘大学

KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY